



それでもわたしたち
はせかいを
いやしたが

つ
た、あ

い
かわらずに猶も

目次

それでもわたしたちはせかいをいやしたがった、あいかわらずに猶も	1
---	---

それでもわたしたちはせかいをいやしたがった、あいかわら
ずに猶も

それでもわたしたちはせかいをいやしたがった、あいかわらずに猶も

雫が玉散る。そのあやうさだけが張る。存在していたのはそれ。壊れ、散る。わずかにでも身動きをしたならば。 無く滋る樹木の葉のおびたゝしいみどりのうへの濡れたその色のきらめきの透明にかこまれて。取り囲んだ葉の露の群れはもはや四肢に微動だにも赦さず。壊れる。或はなにかもが赦されていた。つゆのはかなのかゞやきの雫になって様ゝにも一様に玉散るのをさえ受け入れるのならば。あなたを叩き殺してあげよう。あなたがもしそうするというならば。誰が壊しそして悦に入り得るといのか。水滴の葉うへのふるえのあまりにもな繊細を。まよわずに私が叩き殺してあげよう。あなたを血に塗れさせ、生まれ、かつても猶も生きて在ったことそれ自軀を後悔するほどの制裁のうちに、と。

そう唇がさゝやいた。私のくちびるが。已にあなたを八つ裂いた殺戮の舉動の儼い亂れさせた雫は宙に玉散っていた。その時に。今まさに。血。知る、その手づからにはぎとった生首のあまりにも見馴れた顔、知った。——じかにはついに一度たりとも見たことさえもないくせに。知っていた。とはいえ冴えた月の夜の池のおもにでもあなたは私を見つめていた。あくまでも私に見つめられながらもとさえも思うだにも死くも目をひらく。覚める。

夢、と。その、見られていた間には慥かに恠しいまでもあざやかだった夢をなにかに思い合わせでもすべきだったのか。無理やりにでも象徴と兆しをさがして。遠い、かつは最早住み馴れた異國の朝に、わたしは眼を覺ましたには違い死い。妻の代わりに抱いて寝た少女は傍らに素肌を曝して、靜かに。寢息をさえ立て死い。明けを知りかけたゞけにすぎない暁の空のまどごしの光は朧にすぎて、空間は單に已に滅びたけらがりをとゞめるうす闇にすぎ死い。ことごとくのものゝしずんだ色あいのうちにチャン、——Trangはいよいよあざやかにかの女の肌の色の褐色を曝していた。その種族。嘗てはアメリカ製の戦争映画の中で、誰にも名も記憶され死い中國人が演じてゐた。いまや私の故國では溢れかえりすぎて家畜以下の卑賤奴あつかいされているには違くない人間種の、そのひとつのかたち。ベトナムのダナン市から一歩だに出たことの死い少女は背を向けたまゝに、あるいは私は彼女の生きて有る痕跡をさぐった。身をよじって背中に耳を付け、女の體温が在った。體内にいきものゝ音響がひゞいた。耳をすますとも死くきいておとに

きく女の胸に鳴るいのち

その褐色の

肌のみしる夢

髪匂いと髪沁ませた汗が匂った。おもう。そめたのは雪か櫻か白かすむ

さかりの春に

ほろびの形見に

その日故國の咲き初めの櫻は花瓣にふれた新種のウイルスといつもの彌生に稀な雪を知ったと知った。

4月26日、時に土砂降りの雨が降った。ベトナム。ダナン市の街路樹が雨に揺れた。濡れた大氣は白濁した。ひくゝ霞がこもる。

濕氣。

肌にふれる。

或いは、女の。

ふれた肌の。

汗。

例えばチャンの。

ハオはもう私にはふれない。

ヤンのかの女の夢の中発情の中で何度もふれる。

沙羅の樹の花は白い。あの巨木。花。小さく、かつはおびたゞしい。

みどりの色の瑞々しさのすきまに竊に繁殖した悪しき黴にだにも似て。

——生きてた？

女が殊更に耳に唇を近づけて云った時、髪毛の匂いがいまさらに鼻に入った。三月。「死んだ方がよかった？」さゝやく。

——流行りのコロナで？

笑った女の息が頬に、私は女の借りていたホテルの窓の陽ざしの斜めの「...それ、」侵入を見た。「ちょっと期待してたかも。」名前は妃奈子、姓は弓削。美しいには違いない。何の疾患かは知らない。顔を含めた半身のほとんどが内出血したように黒ずんでいた。「今年、あんまり暑くならないね。」ダナンの三月は已に夏である筈だった。もはや観光客もい死海邊の町に日本の六月ほどの気温しか死いのは或いは歪にさえ思えた。「連絡くれない間に、なにしてたの？」

地球は滅びるのだろうか。少なくとも今の生物は。

「...ね、」

さゝやく女は明らかに私の腕に甘えたがっていた。距離にわずかで執拗な隔たりがあった。臆而すれすれの距離に身を匂わせた。「濃厚接触した？」

云った。

「どっかの女と。」

「お前以外の？」

女は笑わなかった。あえてすぎるにもた眼差しをくれるでも死くわたしを纒かに見上げた。瞳孔はひらいた。眼差しが私の顔を見ていた。何を見ていないかのようにも、意図も死くに擬態して。したいの？

そう思いだしたように私が云った時に、やゝあって女はさゝやいた。

「なにが？」

「濃厚接触」

「傍にいたいだけ」

「嘘」笑う私に遅れて、そして女の笑うのを見ている私の胸元にその指先を、音も死くに至近距離に迄ちかづけて、そのまゝなにゝもふれない空中に停滞する指先は自分の目に見つめられた。

妃奈子二十代前半の筈だった。私に比べれば半分近くしか生きて居死い。それによる幼さは感じ死い。かつて風俗で荒稼ぎした。よく稼げたものだと思った。その、云って仕舞えばあまりにも個性的な容姿が、或いは男たちの欲望を歪に狂わせて、むしろその體に群がらせたのかも知れ死かった。慥かに、妃奈子の造形は匂う程にも美しかった。妖艶ということ葉をあくまでも丁寧になぞった姿は、その半身をだけさながらに、几て臺死し穢れさせたかの黒濁のなまなましさが彌ゝにきわ立たせた。これ等のこと葉が差別的な をは知っている。厥がなんだというのか。妃奈子はなににもかも普通ではない氣分にさせた。なにか、特別なことをいま、ふたりでしでかせとこと葉も死くにさゝやいて、あたりさわりのない單なる茶飲み話さえ見たことのない風景に變えて仕舞った。妃奈子が笑い聲を一人勝手に鼻に立てた。女にその意図は死かった。たゞ、素直だった。聲。響きは乾いた。

玉散る雫。

「なんか、怖いね。」

渴く。

いつ、ベトナムに歸って来たの？

「...ふれあうの。」

さゝやく。

「大丈夫なんだろうけどさ、」と。云って女はひとりだけ笑む。

妃奈子は二十一、二で仕事を辞めた。それからベトナムに来て貯金という名の遣い切れなかった餘りでその日を暮らした。金が死く成ればまた売ればよかった。肉躰はいまだに充分に商業價值をとゞめた。幸福にか未だその必要は死かった。物価の格差は未だ絶望的な迄に甚だしかった。「二週間前」

「何で連絡し死かったの？ すぐに。俺に逢いに來たんでしょ。」

「はっきり言うよね。いつも。でも、連絡したじゃん。いま。」

「二週間も放置しといて？」

「放置されたい人じゃん？」

「時々だけな」

「自分の都合のいい時？」

「そうでもない。基本やさしいじゃん。俺。」

「隔離されてたから」聲を立て、笑うその「空港からさ、すぐに、...やばいよ。」妃奈子を見詰めた。わたしは「...穢れもの状態。」勝手にベッドに横たわる。「わたし穢くてごめんねって。」笑いやまず、妃奈子は「ごめん、わたしこんなに穢いの?...的な、」赦すともなくて「びっくりする。なんか、...」かたわらに立った儘に「わたし黴菌だらけ?...みたいなの。」見つめていた。

「わたしくさい? 穢なすぎて。...って。」

やさしく。

...やさしかったけどね。

さゝやいた。

...みんな。

慥かに入国隔離の話は聞いていた。爰に来る外国人も。此処に歸った同国人も。聞いていたゞけで忘れてゐた。思えば大使館が注意勧告のメールを寄越していた。「何処にいたの?」

「軍隊? なんか、そういう隔離施設みたいなの。——ニヤチャンだよ。」

「いいね。泳いだ?」

「まさか。」みんな、と。

瞬いてゐた。つけまつげのまぶたが。

やさしいんだけどね、基本。

ひそめてゐた。妃奈子は。

聲を。

「でも、基本、いかめしいよね。これって、社会主義だから?」

「杜撰だろ?」

「日本よりまともかも。」多分ね、——笑い聲。

「日本なんか、なんにもやってないよ。」

こと葉の切れ目ごとに女は鼻に笑い聲を立てる。傍らに立った逆光のうちにくらんだ肌がむしろ白さをきわだせ、黒い肌が鬚りの黒をも知る。その、引き裂かれたふたつの鬚りのすべてをあざわらうように産毛だけがきらめく。タンクトップとショートパンツの女の肌は、その實明らかに肌寒さを知ってゐるとか思え死に。まるで儀式の様にも外国人はこゝでそんな姿を曝す。すくなくとも日本の十月なみにはひやゝかな十二月と、一月にさえも。かつて町にあふれかえていた韓国人たちはもはや此の街には居ない。あのタンクトップとショートパンツの彼等。いまゐるのは基本的には此処に栖憑いてゐる人間たちでしかない。東アジアの。あのタンクトップとショートパンツの。白人の。あのタンクトップとショートパンツの。稀に黒人の。あのタンクトップとショートパンツの。稀にいたインド系の住人たちは不思議にその姿を見かけなくなった。どこにも、ひとりだにも。どこへ行ったのか。三月の始、舊曆のきさらぎ。シンガポールの外国人労働者の深刻な感染が話題になる前の話だった。誰もがそこは対策に成功した國だと思っていた。おしみなき稱賛さえも。

妃奈子が私のショートパンツの中に手を入れた。

眼差しは私を見つめ続けた。

「いる？」

云って、ふたたび笑った。

「何が？」

要る？——と。「お前が？」

「covid19」

とおく、みゝうちする。

聞き耳をたてる誰かの耳を慮ったかのようにも。

「ここ、コロナ、居る？」

と。

「繁殖してたりする？」

確認したら？

さゝやいた。女は聲をたてずにわらった。やゝあって口に含んだ。馴れていた。仕事でするようにもそれをして、女のしたいように私は任せた。その比、已に韓国で感染者数は爆発的な伸びを見せた。検査のし過ぎが感染を呼んでいるのだと日本人のだれもがそう嘲ってゐた。自分たちの成功を信じたがってゐた。

舌が好き放題に形を弄んだ。

日本で日本人の感染者の誰かが野放しの儘にフィリピン・パブに繰り出して、すくなくとも女の一人に感染を擴げた。その後で男は死んだ。癌だったか何だったか。重篤な疾患を已に躬に抱えていたと云った。残された彼の親族の見るべき風景を思った。あるいはその男の最後に見た風景が氣になった。インターネット上に、様々な聲が様々にも逢ったことも無い男についてさゝやき合っているはずだった。非難。中傷。嘲笑。揶揄。中傷的な感傷。抽象的な干渉。政府批判。人種差別。いまさらの倫理の稱揚。こと葉の逍遙。商用のウェブ・サイトに躍る。憂鬱な氣がした。なにも見なかった。眼を閉じた。最後まで導く氣もなくていつまでも、悪戯じみた妃奈子は笑んではたわむれた。

その日私はそれ以上に女を知ることもなく、妃奈子の唇もそれ以上をは知ろうとはしなかった。私の唇をさえもふれずに、或いは、賢明だったかも知れない。肺に居るのなら、すくなくともそこは遠い。後に、精巢にもウイルスは潜伏するという報告のあることを知った。本等かどうか知らない。少なくとも呑める程度のお湯は人もウイルスも煞さない。すべて二時間以上煮沸してしまえばいゝ。

二月終のいつか。緊急事態宣言ということ葉を知る。はやいはなしが戒嚴令のようなもの。

スマートホンにベトナム語で Bo y the という名義で通知が入る。ベトナム語は判らない。醫務局とか、醫學部とか、そういった政府機關。

早朝のカフェでひとりの時間を過ごして家に歸ったその日の午前は二月の終りだったの

か。その年の舊暦でようやく如月の初めにふれるかふれないか。その日にシャッターが半分だけひき開けられた中に入る。そこは妻の家族たちの家だった。My、——ミーという名の二十九歳の女。それが私の妻だった。三年前に結婚した。日本のロジスティクスの会社で働いていた。私の口利きではない。ウェブで勝手に見つけた。日本語は話さず。片言のへたくそな日本語よりは流暢な英語のほうが重要だった。会社の家族ぐるみの慰安會に乞われて出席した時に日本人管理者たちのスピーチを聞いた。明らかに現地のそれよりも癖のある参攷の教科書が透けて見えそうな英語のスピーチに、お前はあれが理解できるのかと聞いたらこれみよがしに頷いて判り易いと云った。easy、と、——de、即ち易しい。おそらくはそのベトナム語の直譯としての英語。英會話として正しいかどうかは知らず。英語など私には片言の知識しか無い。開発途中の更地を廣大にも曝して、ダナンの川沿いの開発の進むエリアの古い家はブーゲンビリアの樹木を庭に抱いた。そこだけが昔の統一の三十年戦争の比のたゞずまいを、想うに、残して居た。かろうじて。コンクリート造りの古い家屋。かろうじて崩れない。餘にも粗雑な。——あの山を。と。かろうじて父親たりえているミーの父親はかつて海沿いの山を差して云った。米兵はモンキー・マウンテンと呼んだんだ。巨大な観音像が海のむこうを見る。そこに寺がある。家の中に入る。日が翳る。緑色の淡いペンキで壁の全面が塗られて染みを曝し、所々にはげかけさせる。人の氣配がした。今日が日曜日だったことを思い出す。奥に歩いて炊事場の近くの私の、ないしはミーの部屋の戸の半ば開かれたのを押し開けた。背骨に鳴ったきしむ音に、ベッドの上に素肌を曝したロイ、——Loi が横たわったまゝにのけぞった。私を見た。一瞬、彼が何が起きているの判らなかつた顔をした。ミーと父親の違う弟のロイは父親に似ずに美しい。長身で堀の深い顔をさらして、寧ろ南部風の顔をさらしていた。ロイは不意の夫の亂入に戸惑った。姉との交尾のおわりのまどろみのうちに。はにかみ、耻らい、そして夫に譲るように立ち上がって適當にベッドの上に投げられていた衣服をつかむと立ち上がる。

——歸ってきたの？

そんな親しみのある笑顔を呉れて、服を着ることも無くてそのまゝに部屋を出た。驚くともない。ロイとミーとのその關係は已に知っていた。とはいえ居心地が悪いのはお互いに同じには違ひなかつた。ミーは寐てゐた。或いは寢たふりをして居るのか、朝の起き抜けの行爲の終わったあとの肌の汗ばませたまゝに、背を向けて寐息さえ立てるでもない。年中張り放しの蚊帳をもたげてベッドに座った。振り向きざまにミーの二の腕をなげた。ようやくにミーが目を開いて私を振り返った。まどろみの朧の中にやゝあって、零れるように笑顔をくれた。あざやかなそれ。纔の邪氣も無くに。どこに行つたの？ と、——di dau？

おそらく、女のそう云つた聲を聞く。私は應なかつた。微笑むわたしの顔を見つめて、ミーは見蕩れるような眼差しをくれた。他人の潤みを見た。身をよじって腕をひらいて差し伸べた。——わすれてる。

こと葉もなくさゝやく。

わすれてるわ。

赤裸ゝにも。

わたしを抱きしめることを、と、氣配に、わすれてるわ。ミーの求めるまゝに私は女の

汗を知った肌を抱いてやった。ミーの寝汗。あるいは、昨日添い寝して遣った私のそれを含み、かついまロイの移したそれをも。いくつものバクテリアを繁殖させるのかさせ死いのか。或いは、繁殖させさせ死い肌ならば、それはあまりにも荒廢した肌だったに違ひ死い。滅んだ壞滅の肌。鐵でつくったロボットでさえも命の有機体をその表面にくらからは繁殖させる筈だった。しぶとく、強靱な類のそれらを。生きる。汗がおった。生きて有る。髪の毛の匂いも。姪っ子だからなのか。チャン、あの少女のそれに似て思えた。チャンを思うともなく想起する。或いはヒト種の鼻孔は犬の様にはとぎすまされて死い。見かけをおなじくするそこにあからさまな差異を見つけ出しておのゝくほどには。人間種の下等で劣等な嗅覺。及び聴覺。私が猫だったらシャッターを潜った瞬間にはふたりの人間のさゝやき聲が寢息かくらひは聞き取ってゐたはずだった。さゝやく。たしかにそうだった。聲。部屋に入ったとき、背を向けて横たわったロイはミーの腰をなぜながらに何かさゝやきかけて居たように見えた。——愛してる。或いは。彼女が眠っていた譯は無かった。——ぶっ煞す。或いは。——子供つくらない？ 或いは。ミーが好んで私に買い与えたユニクロの——肉食べたい。或いは。Tシャツごしにもミーの肌の汗の質感が——今朝霰が降った。或いは。執拗に——俺の口の中に。或いは。傳わった。——灼熱の霰が。或いは体温。發熱する生き物の有機体。

唇を呉れた。ミーは抗わなかった。六歳か五歳にはミーの母親は死んだ。その死の理由は知ら死い。聞いては死い。その時ミーは口ごもった。臆而目を逸らした。あえて詮索し死かった。その死。おそらくはおよそ二十世紀の終り、且つ九十年代の終り。だから戦争のせいでは死い。好き好んで中東のどこかの戦地にでもベトナム製の線香か念佛でも売りさばきに行つてゐたのでもなければ。佛陀には目が三つあるのよ。ミーが教つて呉れた。解脱の時まさにその目が額に口を開ける。そう云つた。いつか。ミーの眼差しに怯えと恍惚が見えた。その時に。娑羅雙樹の花を見たことが在る。夏椿ではない。ベトナムで。沙羅の大樹。南の巨木。墓地の奥の手入れの死い森林の中にならずしも美しいとも可憐とも瀟洒ともいへ死いそれ。寧ろあきらかに歪な小さな花が竊におびたゞしく咲いて、寄生の菌種の繁殖じみた白を曝す。美しい緑の間に間に。——花、と。佛陀の花だ。そう云つたのはミーだった。ほそい指に、その大樹の、見上げた上方を差した。彼のシッダールタ王子の華といえば蓮か沙羅雙樹に決まっている。この花はその花に違ひ死い。アメーバ状の生き物が無數に蛸のように手を広げたかの。花。妙に原始的な匂いのするかたちだった。無殘な迄の無數の繁殖。その形と色彩。ミーの母親の墓地。死の二年後にはやもめのタン、——Thanh は後妻をもらったに違ひ死い。ロイは今年二十歳になったと舊正月の日にミーが云つた。或いは數えなのか。ならば十九歳なのか。その母親のヒエン、——Hien は死んでゐなかつた。ヒエンの両親の家に圍われていた。保護？ ないし隔離にも似て。タンが彼女を嫌つたに違ひ死い。誰かの所謂法事だのなんだの機会にヒエンが連れられて姿を顯すたびにタンは目を背け、そして何處かに出かけて仕舞うのが常だった。いつから姉弟の關係が始まったのかは知らない。想うに相當に長い間二人は睦みあつてゐた筈だ。つれ添うた夫婦よりも親し氣な氣配が二人には在つた。抑ゝ私が妻を奪われたのでは死くて、むしろ強奪したのは私の方だった。すくなくともロイの見た風景の中では。愛し合い求めあうふたりの見た風景。彼は永遠の伴侶の形通りの幸福のために身を引いたに違ひ死い。——あなたのために。

と。

あなたの幸福の爲だけに彼を赦す。

躬づから達の思いを断ち切る必然をは決して感じずに。はじめてふたりの関係を目の当たりにしたのは二年前にこの家に遡り住んだその日の、臙而明けた朝だった。寝起きに目を覚ましたわたしが庭にでた時にふたりはブーゲンビリアの樹木の下に抱きしめ合って、奪い合った互いのくちびるにはもはや私の存在には氣附く餘地は死かった。情熱の温度があった。ふたつの肉躰の周圍にだけ。ロイはバイクの洗淨をしていたに違い死い。左手につかんだまゝのホースから、とめども死くに水はあふれ出し續けて、飛び散り、撥ね、亂れ、空間にきらめいては足元に泥の飛沫を散らす。無様な迄に。聲はかけなかった。ふたりの頭上にブーゲンビリアの花が夥しい儘に揺れた。あるいは、鳥。上空には。乃至猫。地の翳りには。

見る。

私を。

——誰？

不意に目を開いたロイが私を見た。それとも、氣附いたから目を開いたのか。慌てゝロイはミーを引きはがした。水がミーの下半身をずぶぬれにして、彼女の立てた悲鳴を私は笑った。ミーは悪びれなかった。私が何を云うでも死いはずだと已に知っていたのかも知れ死かった。謂わば感覺的に？ 女なら慥かに幾らもいた。私には。私が彼女を咎める筋などありうべき筈も死い。怒りを感じ死いでも死かった記憶があった。及び屈辱？ 最早ミーは水びたしだった。私は大げさなミーの悲鳴を笑った。姉にしどろもどろのロイが水滴を更に撒き散らさせた。宙に雫がおびたゞしくも儼う。ミーが聲をたてゝ笑った。私はそれを見た。邪氣も死くに。飛沫。

散った。

美しい。

聲がさわぐ。

音響は耳にだけ響く。

一瞬だけ、ロイが私を氣遣った、その癖に身構えた、云って仕舞えば複雑で雜然とした一瞥を呉れた。——くるの？

と。

お前、くるの？

例えば、

こないの？

彼は私が彼を羽交い絞めして血祭りにすることを臉の裏に見ていたのか。齒をへし折り、指を折り、髪を引っ掴む。

ミーは私たちに笑いかける。

泥水で口をすゝがせのけぞらせた顔面に蹴りをくれる。

笑う。

血まみれの豚じみて哭け。

聲。

たゞ今在る を身體の痛みにおいてだけ認識させてやる。

飛び散る飛沫は水の、それら、その。
虹を、——と。私は思った。えがけばいゝと。
ホースの先にでも、ちいさく。
私は赦したわけでは無い。まさか。そんな家畜じみた。糾弾したなどさらにだにもない。
何故？ しがみつくミーの腕を引き解いて、部屋から立ち去ろうとする私にミーは明かな
不満の顔をくれた。——もっとよ。
こと葉も死くに、
——むしろ永遠に。
その汗まみれのからだを？
私が髪をなげるのをミーはゆるして、云々、

4月27日に片山郁夫、通稱専務に電話した。
「松原って、元気？」
役 は必ずしも専務ではない。
「代々木上原の？...頑張ってますよ。あいつ。ま、あんなことの跡ですけど」
そ、と。
私はそう言って、ま、がんばれって、おれが云ってたって伝えて。
「あれ？ あいつだけ？」
「あいつだけ。がんばれ、って。」
「なんか、在りました？」
片山は不審を隠さ死かった。いまや現場のトップたる自分を越えて部下の一家長如きが
本来雲の上であるべき社長に飛び超えてなにか絡んだらしいのが不快である、と。
私は微笑んだ。
音声通話だった。私のうかべた笑顔のかぎりもないやさしさなど、片山に傳わるはずも
死かった。

ニー、——Nhi、彼女の豊満な、肥満しかけた死體の頭を割られた血まみれがドラゴン
・ブリッジという橋をすぎた交差点の大通りの真ん中になげすてられていたのは四月
の初め、舊曆の彌生、イタリアとスペインで事態が凄惨さを描き始めてもう何日も過ぎ
たころだった。何萬もの死者。數で見れば數に過ぎない。そのひとりのひとりひとりの
かけがえも死い命に何かを思えと言われようが、見ず知らずのひとりの何萬人の中のひ
とりに何をか思い得る可能性など何も無い。きれいな迄になにも。他人の死。あきらか
な。あからさまな。慥か四月の五日。
ニーの死體を見つけた早朝に、その、恐らく六時前。明けの比。発見者の名前も知らない
トラックの運轉手は寫眞を撮って SNS にアップした。多分。ベトナムの SNS、おそらく
は Zalo に？ 後にミーとチャンがそれぞれに私に見せた。その画像。俯瞰でとられたピ
ンク色のパーティドレスのピンクを寧ろ黒く染めた血の色は紅。未だ薄暗い明けぼの

にカメラのライトが照らし出した何か隠し撮りじみた氣配の陰濕。ミーが嘲ることを予測した。出勤前の朝。むしろミーは繊細な歎きを見せた。だれであっても死は死だった。悲しい。こんなときにも、と。Covid19に何かのわりも死んで死んで仕舞えば、何かそれだけで場違いにさえ見えて、或いは私は眉をひそめながらに笑いかけたのを隠す。無関係な死というのならば一月のはじめのアン、——Anhの癌による死さえもがそうだったには違い無い。あの頃には已に武漢がウイルスに汚染され始めていた筈だった。人工ウイルスだと誰かが云っていた。インターネットお得意の。陰謀。陰謀説をひけらかして陰謀する。陰謀の果てに人が死ぬ。時には。私は何処かで何かを陰謀する日常を過ごす。陰謀説を陰謀した陰謀のおそらく50%以上は陰謀されてさえい死かかった。なぜなら、陰謀した彼かかの女にとっては紛れもない事實の隠されて在ったの発見に違い死かかったから筈だから。ユーレカ、と。明日トイレットペーパーは消滅し、中国人はたくらみ、ぬるま湯には殺菌力があり、アメリカ政府は宇宙人と結託して、北朝鮮の首領は死んで、いまだに日本人は大陸と半島の占領をもくろんでいる。アンは癌で死んだ。それは事實だった。ニーの死體の発見された日、至近距離に寄り添うたチャンの髪の毛が匂って居たことにふたたび氣附く。その時、褐色の肌の腕の胸元に差し出されたていた画面から顔を上げると、うつむくチャンの氣配に違和感が在った。それが何かわからなかった。や、あってかの女が顔を上げた時、チャンの目に涙があふれているのを見た。アンの後妻のニーを、誰よりも憎み軽蔑していたのはチャンだった筈だった。其の時、その昼下がり、何の都合か私が買って遣ったバイクには乗らずに自轉車でヒエンの家に迄きた水曜日の午前に、私以外に誰も起きて居なかった。庭にブーゲンビリアが相變らずの濃い紫の花を、——乃至、花にまがう紅葉の色を、そこに曝し続けて居た筈だった。慰めるともなく、チャンの頭をなげた。唇をまぶたに添わせた。撒かれた水に水びたしの庭の黒ずんだ濕りが日の下に色を失って在る。

東野克己という名の、東京の店の責任者が私にメッセージを寄こした三月の初めに、——売上半減以下。私は、——やばいです。海邊にミーを誘った。「給料、カットしてもいいですか？」その三月の半ばの日曜日には「やばいの？」ダナン市には外出自粛勧告とでも謂うのか。「やばいですよ。已に。實際、ほら」會社も店も何もかもが閉められていた。ミーの「今、かき入れ時じゃないですか。本来。」會社は閉められない。つまりは「関係ないじゃん。カフェでしょ」物流の會社だからということなのか。考えれば「パーティ、あるんですよ。結構、」今や物流はライフラインに他ならない。あるいは「任せるよ。」水よりも電氣よりも重要な「もうかなり」生存の根元、「存続の危機なんですよ。...なんか」ミーは外出を嫌がった。「ほんと、今年どうなるんですかね。」外に出て、僅かでもある可能性に触れるへの「長引くんじゃない？」拒否。私には「春に成ったら減るでしょ。」臆病にさえ思えたベトナムの「もう春でしょ。」彼等彼女らの神経質な「まだ肌寒い...」當然のものかも知れない。あるいは「でもインドネシアとか、さ」低パーセンテージは即ちゼロではないをだけ「熱帯系もやられて居るじゃん。」意味する。そうならば「そうなんですか？」すねた顔をした。ミーは「知らない？ だったらさ」...ね？

「なんか、言ってたな。そっち、」 どうして、わたしを連れ出したがるの？ 危険な場所に。うちにいて「夏でも関係ないでしょ」 ゆっくりすればいゝじゃない、だって「大丈夫ですか？ 暴動とか。」 已に半年前に仕事を首になっていたロイは「何の？」 早朝に「差別とか外国人排斥とか」

「まさか。」

「いや、わからないですよ。中國人がまき散らしたとかなんとか。アジア人差別？ みたいな？ 結局、親兄弟死んじやった人とかいるのは事実でしょ。遺恨、あるんじゃないですか。見えない敵だし。」

「こっちは死者でゝないね。まだ。」

「マジで？ 暑いから？」

「医療が優れてるからとか？ 敏腕ぞろい。装置最先端。」

「まさか。所詮アジアの極貧國でしょ。」

「アジアの貧國人にリンチ喰らうよ。」

「事實じゃないですか。でも、生活環境穢から耐性あるんじゃないですか。」

「じゃ、日本も汚物塗れにしろよ。」

「衛生の爲に？ それ、やばい。」...店、閉めちゃうことも視野に入れてくださいよ、と。東野は云った。「閉める？」 實際、可能性あると思う。...と、「頃合い見て、店閉めて。幸い元は取っちゃってるんで、出店の時の。全店トータルでは。傷でないうちにやめるか売るかして、次、あれ、5 G のなんかやりませんか？ 新しい時代、思いっきり來ますよ。怒涛のいきおいで。コロナ以後に。コロナがこじ開けた人類の未來一氣に到來的な。」 聲を立てゝ東野は笑った。

海に人氣は無かった。韓國人も中國人もなにもかにも入國規制がゝかって、さらには國內の移動自肅の勸告さえおれば、——勸告とはこの國では實質強制を意味する。觀光街はあらためてその鄙びた素顔をさらす。そこはもとの小さな田舎町にすぎない。居住人口などたかが知れている。開發途中の更地が至る所にありふれた現狀は、結局はその程度の人口しかないということだ。午前の終わり近くに、背後の灣岸道路にバイクの騒音も車の、バスのガソリンの匂いも立たなければ、海は今更に波の音だけを耳にふれさせて、変わらずの潮の匂いを充満させた。

鳥が飛ぶ。

ハオ、——Hau の口にもてあそぶに任せながら頭をなげて、「どうなると思う？」

私は云った。

「なに？」

くわえた儘にその男がさゝやく。

「これから。世界って。」

ハオは眼差しでだけ笑う。

...三月。

アンが死んだときに、チャンは涙を見せなかった。肺から轉移したに違いない癌はもはや手の施しようも死かった。病院がそう云ったのか、この國の流儀なのか。チャンかアンが頼み込んだのか。それは知らない。最後の一週間ばかりを自宅の一階の、彼の父親の寢室に運びこまれた医療ベッドの上で過ごした。父親のカン、——Canh は九十歳を超えていた。家族のだれもはやその實年齢を知ら死かった。三人の息子のもうひとり、タンは入院していた。糖尿病と尿結石のせいだった。結石は已に癬に成っていた。三度目だった。毎日ビールを飲んだ。量をのめるわけでは死かった。缶をふたつ、濡らす程度をこれ見よがしにも大げさに身振り、喉をならし、呑んだ後に息を立て、さわぎなら飲むのが常だった。チキンはまるで酒豪にみえた。もはやミーの同情さえも得られ死かった。アンの肺癌というのは私の推測に過ぎ死い。彼はチェンスモーカーだった。いずれにせよ知った では死い。娘のチャンが看病に当たった。おそらく小學校以上を出て死い。理由は知ら死い。暗い、鋭い眼差しを曝した。褐色の肌が日差しの下にも鮮やかだった。白い肌が尊ばれるこの國で少女はそれを氣に懸ける風も死かった。ミーと背丈は變ら死い。痩せて、からだの曲線をだけでもはや原始的に見えるほどに放逸にも描かせた。女らしいというよりはヒト種の雌。或いは美しかった。深い鬚りを見せつけながら眼差しはその實なんの苦しみを咬むでも死い。あるいはかの女にも苦しみは在ったかもしれない死い。實母は幼いころにアンと離婚した。サイゴンに行ったとミーが云った。今どこにいるかは知ら死い。イスラエルか日本で働いている可能性さえあった。すくなくともパプアニューギニア在住の野鳥研究家が森で Covid19 に感染する程度の可能性においては。離別はおそらく六歳くらいの時か。母親違いの妹は、アンと同居しない賃貸のあばらやに母親と暮らして、おそらく十二歳程度には見えた。二日に一回母親のニーに伴われて顔を出した。かの女も離婚していたのか。それとも抑ゝ入籍していたのか否か。私は知らない。興味も死かった。殺される前のニーは日に日にやせ衰えて行くアンに、大げさな歎きの聲を上げた。演戯じみた。私には何かのアピールにしか見え死かった。或いは自分自身にアピールしたのか。いま正に歎きのあること。そしてその深さを。自分の舉動が暗にチャンを非難するをしか意味しないことにニーは氣付か死かった。あなたの後見する病人は何故かくも悲惨の現状を咬んであるのか。いつかミーにつれられてカンの家に見舞いに行ったときに、ロイは家の前でビールを飲んでいて。カンの末っ子のホアンと一緒に。皿から零れた料理で亂れた赤いプラスチックのテーブルが惨なまでに濡れて匂った。ビールの、茶色いソースの、ニョクマムの、それらの。ホアンが聲を立てゝ笑う。私に手を振った。お前も呑んで行けよ。そういったに違ない。慌てゝミーがホアンを諫めた。かたわらにロイはゝにかんだように笑った。なにも、と。想う。こんな美しい青年が十歳近くも年上の、しかも血の半分繋がった女に何故固執するのか。あるいは心の闇とでもいうのか。乃至、そんな暗いものでさえも死くて、間違いでもなんでもつながりあったからにはそうなってしまった、と、それだけの話なのか。一階のリビングのつけっぱなしのテレビの前でチャンはきれいな猫背に丸まって、スマートホンにひたすらメッセージを打ち込んでいた。字を書くより早く打ち込んでしまうに違死い。その、最近の持ち場を離れためずらしさに奥にニーが来ていることが知れた。私の来たことに氣付きながらもチャンは顔を上げさえし死かった。甲高いニーの喚き聲が聞こえた。ミーがチャンに何か云った。チャンがなにか答えた。ミーは沉默した。表情

さえ變え死かった。奥のドアをひらいてユエンが出てきた。うつむき、悲しげにさえ見えた。笑ってみても悲し氣な顔の儘笑った。そういう骨格としか思え死かった。かならずしも顔が似ているわけでも死いのに。チャンもそうだった。陽氣なアンの骨格は女の骨格に移るとそうになってしまうのか。やさしい手つきだった。ドアを開けるユエンの手つきは。それと氣づかない程の、舞い降りた羽毛のふれるにも似た、そんな。なんでもかんでも大げさに音を立てて羞じない爰の人間たちには珍しく思えた。目が合った瞬間に微笑みかけてふたゝび、すぐさまに目を翳らせた。その心の動きは讀め死かった。いずれにしても、本人にさえ理解できていない繊細がそこにあるに違い死かった。私は目を逸らした。思い直したようにチャンが立ち上がって奥に行きかけた。いきなり立ち止まったチャンが、いまさらに私に振り向いて目配せをした。——好き、と。

あるいは。

——死ねよかす。

あるいは。

——じゃあね。

あるいは。

——頭の中がかゆいんだよね。

或いは。

——あした、死んでもいいですか？

あるいは。

——カゝオ味の夏ミカン、食べたい。

あるいは。

——あしたね、と。その次の日に、慥かにこ一時間抜け出してチャンは、私しかいないミーの家で私を食った。チャンの座ってみた向かいの椅子にユエンは座り込んで、うなだれた。そのまゝにチャンのスマートフォンを取るとゲームをし始める。悲しみ、絶望し、歎き、ふかいふかい悲嘆にだけこと葉をさえもうしなった、そんなうなだれた猫背のまゝに、少女はゲームの音を立てる。憚もなくに。熱狂のうちに。少女は画面の中の風景に没頭していたに違いない。

死んだとき、アンは柩の中で白い花にうずもれた。

柩のそとをさえ白い花にうずもれさせた。

花は、なにがなんでも白かった。

なぜ、そうなのだろう。私は想った。なぜ、死には華やいだ色彩が相応しくないのだろう。一週間續く葬儀の祭壇の出來上がって數時間も経った夕方に、ニーはユエンを連れて慰問した。線香の一本を擧る譯でも死かった。祭壇の前に白裝束のチャンと、ホアンと、ロイと、彼等と話し込んでいたニーはいきなりに激高すると邊りの誰も彼をも見まわしながら怒號を上げた。女が、カンの家の遺族たちの許に一人で戦闘に乗り込んだにも等しかった に私は氣付いた。お金の話よ、と。

さゝやいたミーが遠巻きでさげすむ眼差しを私に曝した。死ぬ前に手紙を送りつけたとっている、と。その手紙で残った金は全部お前にやる、そういった。だから貴女がたは全部私に渡してしかるべきだ、と。嘘だということはすぐに分かった。もはやひとりではまともに歩けもし死かったアンが誰にも知られずに手紙など出せるはずも死かった。

紙切れを一枚をチャンの目の前にはためかせた。その紙でチャンたちを殴り散らすかにも見えて。チャンをも含めた誰もが罵りの声を上げた。傍らにユエンは母親の物なのかかもしれないスマートホンでゲームに興じた。立ったまゝにもいつか見たのに同じ歎きの猫背のうちに、ユエンは静に赤裸々に熱狂する。聲も死く。私は庭先に出た。すれ違いざまのユエンの肩に觸れた。ふいに手招いて、思わずにも、——こいよ。私は、そして随うユエンの邪氣も無い笑顔を見た。庭先の慰問客用の丸テーブルのいくつかの、道際の椅子に座った。傍らにユエンは座りもせずにゲームをした。消音はし無い。派手な爆発音がとゞろく。誰かを撃ち殺す。騒ぎが終わるも思え死かった。ぶち煞す。時間をつぶすともなくつぶした。ふっとぼす。ユエンがふいに想い附いて、無数の射殺の片手間にヒマワリの種の揚たつまみを口に啣えた。舊正月にも、結婚式にも、葬式にも、此処につきものだった。平皿の上に置いてつまられるに任せる。必需のお菓子。種を割って、中の實を取り出す。ユエンが、はにかみながらそ白い純な色のそれをわたしにさしだした。——ねえ。

日本人の私が

——食べて。

種を割るのが苦手なのを、いつかに見て覚えてみたのか。私は笑いかけた。指に挟んだそれをつまみ、口にした。味というほどの味はない。一時間近くの、おさまりかけては誰かゞ再燃させる罵り合いの果ても死さに、なんどもニーは帰りかけながら振り向きざまの参戦を繰り返す。チャンが罵り、罵りの聲の醒めやら死いうちにその時ニーは背を向けた。前面道路に立てられた儘のバイクに乗って、激しい身振りと怒號にユエンを呼んだ。ユエンが歩きかけた時に悲鳴のような聲でチャンは妹を喚んだ。立ち止まったユエンを駈け寄りざまのチャンは殴打した。やわらかな少女の拳で、目の醒める程には鋭く。瞬間に、樹木のなぎ倒されたかにしゃがみ込んだユエンを、なにか言いかけて蹴り上げたチャンを誰もとめ死かった。ニーが駆け寄った。バイクが横ざまに倒れた。罵りの聲がこだましてニーはユエンの投げ出したスマートホンを拾うと動画を撮り始めた。殴りなさいよ、もっと。恐らくはそう云ったに違い死かった。チャンがせゝら笑った。罵声を浴びせながらニーは後退して、ややあってスマートホンを娘に持たせた。撮りつづきなさい。此の莫迦どもを。バイクを、息を切らせながら、どうしようもない莫迦どもを。苦悶の声を大げさに立てながら、屑ども。立たせ直して、糞まみれの豚どもを。通りがかりの白人の手傳おうとしたのはホアンの罵声を浴びた。外国人は肩をすくめた。——なんなんだ？

「この、どうしようもない蠻人どもは。」

或いは。通りがゝりなら誰でもが善良な良民になりおゝせられる。それ以外に術など死いから。

ニーがバイクを出しても猶もユエンは母親に謂われる儘にカメラを向け續けた。その夜に深夜、ミーの家のシャッターを叩きならす音がした。ミーのスマートホンが鳴った。傍らに、思わずに舌打ちしながらミーは名前を確認して、——Trang、と。

チャンよ。

さゝやく。聲をたてゝ笑いながらに話して、電話を切りもせずに立ち上がった。振り向いて私を手招きした。私に抱かれた後のその儘の素肌を青くらい月の光の中に汗ばませ、

白く浮かび上がらせるだけだった。シャッターを開けると、悪戯じみた笑みを曝してチャンは居た。二時。——もう、と。

今日は誰も来死いから、来たのよ。

ミーに、嘲るような笑顔があった。夜目に身に纏った白い喪衣がうすく光った。何日ぶりにチャンを抱いた。ベッドの傍らにミーは添うて、ときに姪の痴態を笑った。

ミーが、その少女に内臓を吐きそうな程の嫉妬を咬んでいる はしっている。

海には人など誰もみ死い。妃奈子と海邊を歩く。

恐らくは交安が見回りに廻っているのかもしれない。従順なベトナム人たち。或いは、日本人の方がはるかに反抗的で、暴力的で、好き放題と野放しとを良しとしてみたのだった。此処では交安には誰もが従った。市場にさえも交安の街宣車が距離確保と在宅の警告に廻った。狭い道に無理やり入り込んだ街宣車を私は笑い、ベトナム人たちは厥を素直に畏れた。

「暇でしょ。」

妃奈子が云った。ふと思いだしたように、そしてそのフレーズの餘りにも聞きなれていたことに今更に驚く、Line で、Messenger で、ありとあらゆる隙にそのこと葉を聞き、あるいは打ち込み、口にもして、再渡越から一週間ばかりたっても妃奈子の肌は前の滞在の時の褐色に染まらなかった。数か月は借りっぱなしになる筈の海邊のホテルに必ずしも引きこもってあるわけでは死くとも、町の中の飲食店さえ警告のまゝに店を閉じてみれば、彼女の肌に灼かれる暇は慥かに死かったかも知れ死かった。アプリのデリバリーを遣っていると云った。ホテルの従業員に親しげにも紹介されたのだとか。

空が震んだ。海は匂った。妃奈子の髪の毛の匂いをさえ褪せさせて、空間を占領するともなくその臭気の色に染めて仕舞う。

一度も妃奈子を抱いて居死かった。思えば唇を觸れ合う さえも死かった。時に、妃奈子の指先は思いだしたように私を弄んで戯れた。「海にでも入ったら？」

「笑う。」

妃奈子が答えた。

「ね、笑うの。すごく。」

「何が？」

「由樹にさ、...おぼえてる？」

「ちっちゃい子でしょ」

「...ね。前、あんた、やっちゃったでしょ。あの子と。違う？ あいつに云ったの。ベトナム行行って。そしたらさ、本気で反対された。」

「当たり前だろ。」

「なんで?...あいつ、言うんだよ。あぶないからやめときなよって。」

「隔離されたじゃん？」

「日本の方が安全だからって。でもさ、感染者数日本の方がめちゃくちゃ多いんだよ。おかしくない？ なんで、安全なの？」

「医療のクオリティだろ」

「死んでないじゃない。こっち。だれも。」

立ち止まって、「…笑うよね。」妃奈子が微笑むのを私は見る。

「こっちの医療のほうが優れてたらもっと笑う。」

潮の匂い。鼻に執拗に染みる。髪をなぜようとした。妃奈子の。想わずに、妃奈子が身をのけぞらせた。かすかに。

我に返って、妃奈子はゝにかんだ笑みで誤魔化した。私は聲を立てゝ笑った。聲は邪氣をしらずに素直だった。妃奈子は瞬いた。——怖く死い？

云った。

その妃奈子の聲を、私は聞いた。

「コロナ？」

「未来。」

ささやく。

「どうなっちゃうんだらうね。」火星が落ちてきて地球にぶつかるに比べれば、たいしたことない。そう言いかけて私は辞めた。

「全部が變わるね。」——いつか、妃奈子はそうさゝやいた。

「なにが？」

「すべて。いまゝで信じてゐた物のすべて。」

「例えば？」

「毎日の安全性。」

「それだけ？」

「日本の安全性の優位性。」

「それから？」

「みんなの、日本人への尊敬。」

「元から死い。只の幻想。」

「あの日見てた、これからのプラン。」

「お前にそんなの、あったの？」

「命の價值」

「逆に値上がりしたりして。」

「グローヴァリズム。」

「加速したりして。後戻りできずに、もっと自由に。」

「戦争？…」

「アメリカか中國が無くなったら、それはそれで面白い世界だよな。」

「もう、夢なんか見れないかな。」

「悪夢なら見れるよ。」

「どうする？」

4月。

もとから仕事も何もしてゐなければ外出が規制されようが何しようが、或いは不自由は無いのだった。収入が減じるには違い死かった。歌舞伎町のふたつの店も、北青山と代々木上原のドッグ・カフェも、道玄坂の個室カフェも何も。道玄坂以外は初期の工費をは己に回収してゐた。一月、東京の東野は例月通りに報告メールしか寄越さなかった。二月、一時閉鎖の相談をした。東野が云い出したのだった。なんらかの社会的に有益なメッセージ性のある建前が必要だった。考えつかなかった。アメリカもヨーロッパも Covid19 など遠くのアジアの不潔と野蠻の他人に過ぎず、心配はオリンピックに過ぎ死かった。抑冷笑と批判の対象にすぎ死かった。生まれればどうせ熱狂するにしても、今その實現の爲になにかを犠牲にすべき程の価値は、オリンピックに誰も見出してゐない筈だった。東野が非正規従業員の出勤と給与をカットした。三月、東野がふたたび閉店の相談を入れた。カフェは全部閉めて仕舞うべきかもしれ死かった。感染源になることには巨大すぎるリスクがあった。積極的に宣傳はしないで維持できる程運営はあまく死い。解約通知の問題があった。原状回復期費と假に半年間完全に家賃支払いが発生することになった場合を考えると、——今回はその可能性が高い。完全な赤字を喰うまでは決断しかねた。東野は次の仕事のプランを考え始めてゐた。たとえそれが非現実的な妄想と空想の類に過ぎ死くとも。4月、東野に家主に賃料を交渉させた。暇な従業員に手作りマスクでも作って賣らせると云った。本當に東野はそれをやったらしかった。結局はそれまでの利益のストックで喰いつないでいるだけのものだった。私の生活も。尤も、今さらに何に金を使う氣も死かった。遊びは遣り盡した。今の生活費も何にも、所詮はたかゞ知れてゐた。

3月に山下要という名の男から連絡があった。Face Book で友達申請があつてから通話が懸かってくるまではほんの二時間も死かった。彼は何がなんでも私に連絡しなければなら死かった。

——元氣でした？

山下が云った。…ごめん、と。

「あなた、だれ？」

私は彼の存在を完全に忘れていた。

——ですよ。

山下はかすかにだけ聲を立て、笑った。氣落ちした風も死かった。

「昔、お世話になったんですよ。俺。歌舞伎町で。忘れたのかな？」と。早口に言う山下の聞き取りづらい確信も禮儀も死い聲に、それとなく彼の人と成りが察せられた。すくなども成功したり、乃至誰かに可愛がられるタイプでは死かった。Face Book の名前を何度考えても、彼の事を思いだせ死かった。

「頸にされたんですよ。俺。昔。淳也です。覚えてませんか？ 遅刻して、優彌さんに鏡月で頭割られそうになって、」

「人違いじゃなくて？」

「な譯ない。俺、ぜったい忘れませんもん。世話になった奴って、そういうもんじゃないかなって思うんで」

結局は最後まで思いだせ死かった。

山下要はいずれにせよ今、日雇いの労働をしていた。そう云った。営業の仕事だと云った。営業で日雇いと言ってどんな仕事があるのかは判り兼ねた。それ以上検索し死かった。その時、思わずに笑って私は、——マスクの工場で働いたら？

そう云った。

「工場なんて嫌ですよ。無理ですもん。」

「なんで？」

「鐵とか、ステン？ 削ったことないから云うんじゃないですか？ あれ、鼻から鉄くずいっぱい出るんで。まじで。ティッシュ、灰色ですよ。」

所謂ネット難民だった。結局は住み着き得る場所を失って、今雑居ビルに寝てみると云った。空きテナントの前の、誰もいない階の通路で。

「國とか助成金呉れるんじゃないの？」

「宿無しなのに？」

「住民票どっかで取っちゃえよ。」

「その金が死いんですよ。」

「ホームレスの収容施設とか死かったっけか？ 池袋だっけ？」

「そこまで落ちて死いから。」

さいごまで山田要は要件を云わ死かった。或いは、自分では云ったつもりになっていたのかも知れ死かった。つまり、金を貸せ、と。もし彼がはっきりと、わかりやすくそう言いさせたら私は何と答えただろう。見覚えも死い彼に金を貸す程の慈善者では死かった。だったら匿名でどこかの國の災害にでも募金した。あるいは、それがヒトの今の倫理のいびつさなのかもしれ死かった。災害で金のない奴に金をさしだそうが、電話を呉れた記憶にない男に金をかそうが、あまねく尊い人として人を救済する救済は救済に違い死い筈だった。だれかその金ですくなくとも一時的には救われるのだった。或いは、貸せと言われた云うだろうか。だったら盗めと。生きられないなら盗まれても死なない奴からあるかぎり盗めばいい。倫理的に正しいかどうかは知ら死い。生き残ってから倫理など問え。空の上には所詮宇宙に俘かぶ月の沙漠しか死い。通話を半ば一方的に切った後で男の Face Book を見た。記事の更新は 2015 年の 12 月で途絶えてゐるらしかった。最後の記事で彼女らしい女とディズニーのランドのほうで写真を撮ってゐた。ふたりの記念日、おめでとう、と。12月12日。コメントは死し。いいねは 23 本。最後から二つ目はスーツを着てゐた。リクルートスーツだった。明らかに着慣れて居死い、着こなしの杜撰さが見えた。何處かの工場の背廣組という なのか。プレハブのように見える事務所らしき室内で自撮りしてゐた。初出社でオフィスで自撮りする莫迦。笑った。後ろの壁の頭の上に何かの賞状の飾られているのが見えた。少なくとも彼を讃えた賞状では死い。キャプションはみじかく、初出勤、と。プラス、何以下のスタンプ。ピース、ピース、いえーい... 的な。10月23日。コメントなし。いいねは 12 本。次の記事は 2014 年。私はそれ以上は見死かった。歌舞伎町でホストを遣ってゐた 90 年代に、実際に何人も店にやとった。そして頸にした。或いは、男にも女にも誰にも刺されないで生きて居ることが私の最高の能力の一つだったかも知れ死かった。咒い殺されても不思議では死かった。名前は忘れた。ちょうど 1999 年に、ひとりの男を首にしたことが在った。顔は最早覚えてゐない。丸っこかった。山下要ではない。今からもう、お前の籍死いから。

私はそう云った。

喚び出された事務所のドアを背に、その瞬間男は立ち盡くした。己に解雇通告がくることくらい氣附いていそうなものだった。いまさらに男は唾然としていた。肩が一度左の端だけあがって、わなゝきかけてまっすぐになった。ゆがめられた。わたしよりも年上だった。元、九州だったか大阪だったかのホストだった。上京する前に地元で経験はあったはずだった。もっとも、抑私が彼の何が氣にくわなかったのかその記憶は死い。「なんとかならないんすか。」

男は云った。

「むりだよ。」

私は云った。

「お願いもできない感じですか？」

「普通に無理だね。限界超えたもん。おれ。己に。」

男は表情を死くしたまゝに私を見ていた。

なにか言いかけた。

なにも云わ死かった。

唇がひらいた。

なにもいわ死かった。

不意に、——あ、と。

男は云った。

わたしは男を見てみた。

なにを思うとも死かった。

やゝあって、

「なに？」

「退職金、死いですか。」

「莫迦？」

失意の底で茫然とした間が一瞬あって、男はゝじめて笑みを見せた。

「出てって。邪魔。」

私は云った。男は私に頭を五秒許下げてでていった。十秒近くたって、ドアの外で大聲がした。「社長ィ、今ィまでィ、すィつげィ、お世話にィ、なりィ、まィしたィ。」さけぶ。「あィりがとィごィざいまィしたィ。」彼がドアの向こうで頭をふたゝび下げたのが氣配で知れた。二日後に大久保驛で人身があった。正確な身元迄知らない。社員が私に、あいつですよ、と。そう云った。見た奴、いますもん。

「ガセでしょ。」

浩輝が見たって行ってましたよ。眼付すでに死んでたって。

「浩輝？」

「まじ情報です。これ。」

「あいつだったら100%デマだよ。あいつの2chネタじゃない？」その日は男を大久保の寮から追い出すべき期限日だった。當然、退去確認に行った常務は誰もゐない、なにもかも置きっぱなしの部屋をだけ見つけた。鍵はポストの中にあった。總て處分させた。

三月の終わりにロイが熱を出した時、ミーはそれを誰にも秘密にした。木曜日だった。ベトナムでも海外帰国組の新型コロナ感染者の数をふやしていた。尤も総計で百人を超えた程度に過ぎない。朝、リビングで、会社に行こうとしたミーが立ち止まった。傍らのロイの部屋から短い叫び聲が聞こえたのだった。私はミーのかたわらに立って居た。会社の送迎バスの止まる大通りまでバイクで送ってやるのが常だった。だから私もその聲はきいた。絶望していて、見る物すべてがなくなしくて、取りすがり歎きを訴える兎ものさえもが何も死んで、仕方も死んで只、いま正に死んで行こうとしている。そんな聲だった。いつもに變らず、なかばひらかれた儘のドアを押し開けると、不意に襲い掛かった死神の姿にすべてを失ったひとりの男がひたすらな感情の混濁を曝して、せめても明確な縫眼差しにだけ姉を見詰めていた。ミーは蚊帳をはぐってベッドに座り込んだ。その額に手を當てた。喉に悲鳴のじみた聲を立てた。一瞬、接觸した自分の掌を見た。臆面ミーは私を見た。なにか言いかけた。こと葉をなくした。そして眉はわなないていた。手を振って、あっちへ行け、と。ミーは二度けたましく瞬いた。云われるまゝに私は部屋を出た。

ミーはその日会社を休んだ。

違和感があった。たかゞ國の全土で百人程度しかいない、さらにそのすべてが已に病院に隔離されている町の中で、ほとんど半径500メートルに満たない限られた周辺にだけ時間をつぶすにすぎない無職のロイが、どうやって陸の彼方を混乱させた病に感染したと云うのか。あるいは、その理不盡さが市中感染ということなのか。部屋には入らなかった。ミーがそれを拒絶した。そもそも私がドアをあけることをすら。咳の音がするでもなかった。人の氣配さえ死かった。咳込んでいなくとも、必ずしも同じ病が同じ症状を常に曝すでも死い くらいの察しはついていた。昨日の夜にはミーはロイに抱かれ死かった。私の知るかぎりでは。ほんのあいさつ程度でも口づけあったかどうかまでは知りようも死い。二度ミーは私に口附けた。肌をふれあった。私になんどもさわったのは慥かだった。ミーの普通よりちいさな手が。ほゝえみとゝもに。大量に同じものをさわった事実がいちいちの記憶もなくに記憶されていた。不安と謂えば不安だった。現實というものにいま初めてふれた氣がした。その午後三時に、ミーは不意に部屋を出てきた。私はリビングでパソコンを弄っていた。なんでもない。不要不急でもなんでもないエクセル・データのファイルの整理。店の賣り上げ、経費、それら。ミーは私に目もくれずに奥に行って、浄水器の水を汲んだグラスを持ってきた。ずっと、まっすぐに前をだけ見ている。表情は死かった。茫然としてはい死かった。眼差しは澄んで冪ていた。なにか考えていた。私の存在に氣附いた。立ち止まりかけて、ほゝえみかけて、且つ、なにか言いかけて、やゝあって、私の傍らにちかづこうとしたミーはいきなり立ち止まった。今さらに、眼差しが深い嘆きを曝した。ノー、と。それだけ口にした。——もう。と。

わたしたちはふれあえないの。

あるいは、唇の向こうにそうつぶやいたのか。そのときに、改めて氣附いて。

「ノー」

と。ミーは我に返ってふたゝび云った。

病院に電話しろ、と。私は云った。

「ノー」

と、ミーはそれだけ應えた。

つまりは、警察？——ノー、と。保健所、と。いゝかけてその英語を知らない に氣附いた。答えは察せられた。

「ノー」

と。

むずかしいわよ、と、——difficult、ミーはやゝあって云った。私たちみんな、隔離されるわよ。

「ノー」

と。

ふたゝびミーがつぶやいた。立ち上がった私が彼女に近づいたときに、後ずさりしてミーが慌てた。

「ノー」

と。見つめ合って、そして、私は何も言わなかった。

ミーが私をなだるようにも見つめていた。背をむけることも死んで、そのまゝのあとずさりの儘に、ふたゝびロイの部屋に入りながらミーはひとさし指を立てゝ自分の唇にあてた。——秘密よ、と。

誰にも謂わないで。

部屋に入るミーは鍵を閉めた。

手遅れだ。

思う。

もう、きみがいまさら俺を拒絶しても、きみは周囲の凡てを己にことごとく穢してしまった。

生き生きしたウイルスの解き放たれた自由ないのちの群れで。

...と。

やゝあって、チャンを思いだす。逢う気にはなれなかった。濃厚接触？——譬えば指先にかすかに眉にふれるというさゝやかな。知らない間でもないアンにいくら何でも申し譯が死い氣がした。どこかで彼の娘を預かり、庇護している意識が私にはあった。譬え實質慰み者にしているには違い死くとも。少女との 次第は己にアンさえもが知っていた。姉貴分の肉親が連れ込んだ男に自分が戀をしたことに氣附いた十四の少女に、心の秘密にしておく餘裕は死かった。その時には己に公言していた。あの男は私の夫だ、と。誰に憚るともなく。アンの心のうちは知ら死い。すくなくとも見た目には笑って許した。時にはミーを説き伏せもし諫めもしたことは知っている。男には己に妻がいた。少女はうなづきはし死かった。その姉貴分には秘密で、己にしるのびこんだ昼下がりの平日に私の肌を知っていたことをはすくなくともミーにだけは秘密にして。その十四歳の十月に。私はパソコンを閉じた。ヤンの家にバイクを飛ばした。

ヤン、——Giang はダナンの隣のクアン・ナム省——と、あるベトナム人は日本語でそう云った。県、ではなくて。省。その違いは私には良く判らない。所詮外國の区分に過ぎない。...ホイ・アンで有名な田舎町にヤンは小さな家を建てゝいた。同居の兄は日本の年末に再び日本に働きに行つて不在だった。両親はダナンに元からの家が在った。ひとりで好き放題に住んでいた。ヤンの、中から南京錠の懸けられた鐵門の前で Line をならずと、二階の窓にヤンの姿が見えた。手招きした私をそのまま十分近くまたせた。たかが二階からおりだけのものを不可解な待ち時間は、私をじらせた。一階のシャッターを押し開いてヤンが姿を顯した時に、その理由が知れた。あきらかに外行用のパーティじみたドレスを着て、メイクも完璧に施されていた。うちの中に引きこもっているらしいことは、中に入ればすぐにしれた。窓も何も閉められきつて、ひかりさえまともに射し込まない家の中にヤンの躰臭と體温がこもっている氣配が在った。その肌の濕氣さえも。——なんで？ と。

「なんで來たの？」

ヤンは云った。

「家にいたほうがいいよ。外、いま、あぶないよ。」

かの女の聲はかん高い。

「來死の方がよかった？」

ヤンは答え死かった。やゝあつて、様ゝな表情にくずれた笑みをなしくずにさらして、そしてヤンは笑った。「わたしは大丈夫。さびしく死いけど、」と。「いゝよ。」さゝやく。「...さびしかったよね。」勞りの眼差しを私に呉れた。想えば一か月近く女を放置していた。そんな をは何も死かったように、昨日わかれたばかりにも思えた。やゝ太つて見えた。たゞでさえ肥満すれすれだったの躰の肉附きのよさを、更にはじけそうにも満ち足りさせて、私を手招きしながらリビングの椅子に座らせた。——弟、コロナになったんだよ。

私は云った。

ヤンは眉をしかめた。「弟？」

「そう」

「弟、居るの？」

「居るね。前、話したよ。慥か。」

「嘘。聞いて死いよ。」

「話したよ」

「聞いて死い。どこにいるの？ 東京？」

「ベトナム人のだよ。」云った私に笑いながら縋りついてヤンは甘えた。「奥さんの弟？」

「そう」——嘘、と。じゃれる笑い聲に邪氣は死い。不意にしなだれかゝつた拍子にか、ヤンは今更に瞳孔の開いた眼差しに私を見詰めた。見つめ合う、乃至、一方的に詰められる時間が過ぎた。ヤンが躰臭を匂わせた。「太つた？」ヤンは不意に、思いだしたに似て、そう云った。

「ヤンが？」

「ちょっと、太つた。」

「可愛いよ。」

「嘘。」と。

私に口づけようとしたヤンを私は身をのけぞらして拒んだ。ヤンは素直に戸惑った。「弟、コロナだよ。」

「嘘。」

「ほんと。」

「嘘」

「うつっちゃうかも。」

「嘘。」

「躰ごと殺菌した方がいゝよ」ヤンは私の唇を奪った。奪った瞬間に、唇が息をもらした。笑ったのかと思った。しがみついて、擴げた股に私をまたいだ。上になって羽交い絞めして、飽もせずむさぼる。ヤンは已に目を閉じていた。私は見つめていた。メガネが、ヤンの躰の蠢くたびにずれて、終には落ちそうになるのをヤンは氣に留め死かった。…寂しかったよね？ と。くちびるを未だにはなし切らずにヤンはさゝやいた。「さびしかった。」

「本等？」

「毎日、思ってたよ。」

「嘘。」

「俺、繁殖しに来たの。」

「なに？」と。知ら死い、ないし、忘れて仕舞った日本語。「遺伝子、遺しとこうかなって。」

「なに？」

とまどうわけでも死くて、私をみつめたまゝに、「コロナで死ぬ前に、お前に子供作らせようかなってさ。」私は聲を立てゝ笑う。「私がいゝの？」

ヤンが云った。

「奥さんじゃ、駄目なんですよ。」

「まさか」

「嘘。」

「ほんと。」

「いゝよ。しかたないから。」後悔しないよね？ と、ヤンが念を押した。「わたしが、いゝんだよね？」初めて抱かれるわけでは死かった。私のなげた言葉が、ヤンにはじめて見る風景をみいださせていた。家ごもりのヤンは焦りさえもして、二階のベッドルームで汗すら流さない素肌を曝させて、そしてしがみついた。肌がべたつく程にふれあった。唇をかさねた懸けた時に、——こわくない？

云ったわたしに、ヤンは應えた。

「ぜんぜん。」…嬉しい、と。言葉も死くに氣配のうちに、ヤンはゝっきりとそう傳えた。

夜も更けて歸った時にリビングでタンが自分でぶつ切りにしたスイカを憑かれたかにも貪り喰って居た。音を立てゝ果汁をすゝり上げながら。糖尿病の詳しい症状は、それになった が死いので終には私にはわから死い。少なくとも彼に於いては、糖分が過剰な

中毒症状を呼び起こしているように思えた。彼は體中で砂糖に飢えていた。左の視力を殆ど失っていた。もはやバイクにさえ乗れ死かった。右手の握力が極端に弱っていた。時に茶碗を落として割って、ミーに罵られた。ロイは無視した。聴力があきらからに悪化していた。テレビの音聲はいつも通常の二倍だった。食い散らす自分を羞じたのか、手づかみにスイカの一切れをつかんで私のほうに差し出した。

——お前もどうだ？

いつにない舉動だった。

——食えよ。

薬剤を大量に入れて、チューブに性器を包んで、かれのショートパンツにぶら下げた医療用のビニール袋に尿を垂れ流している。まる一か月ぶりだった。又結石でもできたに違い死かった。何度目なのか。慥かに、数日前まで十日ばかり、毎日家でビールをのんでいた。昼食に一本、夕食後に一本。もはや癖になっているのは明白だった。笑うしかなかった。にも拘らず彼は生きることに固執した。Covid19 以後、彼は自分で自分専用の消毒液を、おそらくはかゝりつけの醫者からか入手していた。そとでは絶対にものを口に死かった。もっとも、ミーも同意見だった。食事はいつもロイが作った。野菜も何もなんども洗わせた。わずらわしがられて、振り向き様のロイにどなられるたびに甘えた猫撫で聲で言い譯を垂れながしながらも。

私はあいさつ程度の笑顔をさえもくれてやら死かった。彼が生き残るとはとても思え死かった。たかゞ結石と糖尿病が明らかに彼を殺して仕舞うのは目に見えた。チョコレートを偷み喰いするところさえも見た。インシュリンをうとうが何をしようが、彼は死ぬしか死かった。二週間後にはもう一度手術をして石を採ることになるはずだった。何度目なのか。ロイの部屋のすこしだけ開かれたドアの向こうは完全な暗闇だった。ロイはそこにいるのかも知れ死かった。ミーはどこに行ったのか。ドアを開けようとしたときにタンが、背後にノーと云った。大げさな身振りを添えて。——入るな、と。照明はあえてつけ死かった。くらがりに、ベッドのうえに人影があった。ふたりぶんのそれ。素肌をさらしたミーがおなじくくのロイにしがみついて、人肌に發熱の肉體を温め、必死に癒そうとしていたように見えた。ミーは已に寝ていた。いまさらに何かを残しておこうとしたのか。死に懸けて死ぬ迄に十か月も猶豫などあたえられる筈も死いの？

あおむけのロイにすがりつくように、腕も足もからめてミーは半開きの唇に寢息をたてゝいた。ふたりの躰の匂いがにおう氣がした。ロイは目を覺したまゝだった。哀れみを乞うような眼差しに私を見上げていた。頼むよ、——と。

俺を癒して。

思わずに、私はわらいかけた。

俺たちを救ってよ。

ロイは瞬きもし死い。

でき死くても、たとえ救え死くても、と。——俺たちを救って。

笑いかけた儘にわたしは部屋を出た。あるいは、息子たちのそのあられも死い痴態を知ってタンはノーと、私を制したのかもしれ死い。タンは已にそこには死い死かった。テーブルの上がしたゝったスイカの果液で濡れていた。種が弃てられ死いまゝに散亂する。スイカ入りのタッパーだけは片付けられていた。毎日、自轉車を漕いだちかくの市場で一玉

かった。果物ナイフに切り刻んだ。喰い盡した。赤い糖分のしたゝりは彼の寶物だった。間食の様ゝなフルーツを併せれば、一日に7回以上は食事をした。だれの云う も聞か死かった。あるいは、最早聞け死かった。肉軀は彼に意志の自由など与えてい死かった。今、タッパーごと部屋にもちこんで、そこで喰い散らして居るのかもしれないとわたしは思った。確認しようとは思わ死かった。興味は死かった。

4月に入って東野がLineを鳴らした。履歴で見れば20日。鳴った瞬間には要件は已にしていた。解雇しちゃえよ。私は云った。「カフェの方、實際、無理でしょ。數字見ると。そう謂えば、さ。新規患者の數減ってるじゃん。若干。本當かどうか知らないけどね。ともかく、客觀的にさ。アタマ打ちの時の數が、謂ってそれなりに大きいからさ、感染者一日二人三人ペースになっただけで沈靜化って言われるんじゃない？ 僕たちわたしたちパンデミック乗り超えましたって。實際はゼロじゃねえんだろって話なんだけど。でも、それまで最低二か月かゝるぜ。もっとか？ それまでスタッフ半數以下でやらせろよ。そのうち店閉めるから。後釜、みつかんないかな？ 箱の。なんとかして。いまどき死いか。マスク屋の新規オープン計画でもあったりし死いもん？」

「でもあいつら、謂って、仲間みたいなもんですよ。もはや。」

「心中する氣はない。」

「だったら社員給50%カットとかは？ 非正規って、今、カフェの方、各店二三人しかいないんですよ。ほら、そういうコンセプトやってたじゃないですか。バリスタのプロとサービスのプロ・オンリーの店、みたいな。給与ざっくりカットでも、それでもついてくると思いますよ。今のあいつらなら。俺が演説ぶっこきますよ。感動スピーチ・コンテスト準優勝レヴェルのやつ。一發。」

「優勝じゃ死くて？」

「若干謙遜。日本の美德で」

「まだるっこしいじゃん。ざっくり半分切れ。要らない奴だって居るはずだよ。そもそも。全部が全部有用人材だなんて組織は本來、普通、絶對的に存在し死い。...てか、お前の持論じゃ死かったっけか。」

「結局、キャラもあるから。」

「狀況が違う。」

東野は沈黙した。

なにか言いかけた。

私は聞か死かった。

「ホストの方は店しめちゃえよ。」

「いま、實質クローズと一緒にですよ。...あぶないんで。クラスター入ると。」

「あいつらなんかほっときやいゝんだよ。店なんてさ、閉ってゝもさ、金なんか自分でプラベで落とし込めるでしょ。いくらでも。いくらなんでも、まがりなりにもホストなんだろ？ 奴ら。」

「貢がせるってこと？」

「そういうもんじゃない？ 云ったろ、お前の新人時代。女に金使う男は所詮クズだって。」

「貰がせてなんぼと。で、受け取らないのが男のやさしさだって言いましたよ。」

「状況違うじゃん。」

「そのわりきりかたやばすぎませんか？」

「家賃なんか風間がなんとでもするよ。」

「オーナーも歎いてますよ。」

「こういうとき以外あいつとりえないじゃん。俺が云っとくよ。あいつ連合の舎弟じゃん。企業舎弟なんだからさ、脅すか泣きつくかさ、駄目だったら指でもなんでもおとしちまえよ。謂って、そっちのはしくれじゃない？」

「そういうもん？」

一息ついて東野は云った。

「俺に、名義下さいよ。」

「もう社長じゃない。」

「實質、俺が全部仕切りますよ。謝禮としてだけ、いつも通り手取りはらいますから。」

「おまえじゃ保たないよ。」

「保たせんだよ」東野は叫んだ。

いきなりの怒號に、私は一瞬沈黙した。やゝあって、そのあまりにもな純情に笑いそうになった。

「どうやって？」

「保つよ。」

「不可能でしょ。」

「なぜなら俺がそう決めたからだよ。」

「云っとく。聞け。」

「聞いてます。」

「無理だよ。」

私は通話を切りかけた。

「お前さ。」

思い直してさゝやく。

「誰のおかげで飯食わせてもらってる氣？ お前、拾ったの、誰？」

東野は應え死かった。

「ま、やれるだけやってみたら？ すみません無理でしたは、もう、完璧、死いよ。判るよね。自分でいったんだから。」

「云いました。」

静かな聲だった。

「がんばれ。」

かぎりなくやさしく、私は云った。通話を切った。東野は来年三十になる。店のホストだった。ホストを上がってから風俗の女と結婚した。ホスト時代以前、千葉か何處かの工場で働いていた時からの女だった。紆余曲折あったには違い死い。結婚は二十七の時だった。子供がいた。腹の中にもうひとりいた。女は妃奈子の知り合いだった。抑々妃奈子を引き合わせたのはその女だった。売れた女では死かった。可愛くもなかった。わ

ずかのやる気さえ、私には起こさせない類の女。東野が情にほだされたとのだしか思え
死か。俺、こいつといると、なんか、心が自由になるんすよね。——結婚式の前日、
逢った東野は私にそう云った。ときめくとか、そういうんじゃないで、...んー、心のい
ちばん深くで、っていうか。そこで、なじんじやうのが、ひょっとして...うん。ホント
の愛なんかなって。ホストには向かなか。十代で、喧嘩の最中に誤って人を殺した
ことが在った。十四歳の時だと云った。なぐった拳が、いまだに覚えてます。はっきり。
人が死ぬ、その一瞬の、その感覚。命が、いきなりぶっこわれて碎ける感覚。いつだっ
たか、そうつぶやいた。云い終わって沈黙して、臆而聲も死く笑った。あれから被害者
の両親の顔を見れたことがないと、忘れた比につけたした。殺した後、自首した。警察
に電話したのだった。...俺、やっちゃったみたいなんで、来てくれないっすか。今すぐ。
鑑別所に入った。前科が附いた。私以外に彼を管理職に仕立て上げる人間など居る筈も
死か。実際には彼にはそれが向いていた。實務の人間では死か。事實、隙の死
い経営ではあった。私よりもはるかに管理能力に長けていた。...いずれにせよ。結局は、
今となれば、結果的にではあれいずれにせよ私は彼を追い詰めた。行く末はなんとなく
に、其の時から讀めていた。しでかす の可能性は 50 / 50 だった。

夢を見た。

當時の謂い方で云う精神分裂病、スキゾイド。その薬を手放せなかった私の母親が、自
分の肛門に間違って頭をくっつけて、血をながす空っぽの頸の先からシャンパンの泡を
唾液じみて吹き飛ばしながら地面中に散った花を食い散らしてた。

その白いちいさな花。

綺麗なども可憐なども言え死い。どこか生物的で、アメーバかイソギンチャクが無様な
手を擴げたような。

可愛げもなにも死い、そして白くちいさいくせに純な穢れない雰囲気さえも全く死い花。
沙羅雙樹。...沙羅の樹の花。

母親がよだれを垂らした。十八の時何度目かで病院に入った。連絡などした が死い。
嘗ての地元の奴等との縁は已に切っていた。連絡のしようも死い。生きて居るのかさえ、
私はしら死い。

目覺めにまどろみは死か。なにかにもかもが、肉體の隅、指の先の先端の尖りまでも
が醒めきって明晰なまゝに、私は自分にまどろんでいる嘘をつき通そうとした。

夜は未だ明けかけの、暁の光さえ曝さなかつた。

かたわらにミーとチャンの寢息を聞いた。

...三月。

二十日くらいの比。

——ともだち、入院したんだよ。

妃奈子は云った。

寝たふりの儘に、あるいは本当に半分以上眠ったまゝで、傍らに妻がスマホの聲に聴き
耳を立てていることは知っていた。

—ともだち？
—びっくりする。
—だれ？
—まさかさ...自分だけ例外みたいな、そんな感覚、慥かに逢ったよね。
—どうしたの？
—コロナ。...あいつ、...でも、いま、仕事して死かったのに。
—あいつって？
—由樹。...客とやってたのかな。ひそかに。市中感染?...どうなの？
—やばいの？
—まだわからない。本人とは連絡つかなくて。これって、当たり前？既読すらつか死
いんだね。入院すると。でも、なんか、...これ鳥羽さん情報なんだけど、
—だれそれ？
—店の人。いゝ人だよ。すっごく。昔、私もお世話になってゝ、でもさ、熱、ずっとさ
がん死いんだって。もう、何週間も。夜になったらなんか、毎日、熱出て。がーって。コ
ロナって思ったわけじゃ死かったらしいんだけど。病院云ったらしいの。そしたらいき
なり入院で。調べたらこれ、例のやつですって。
—covid
—いちキュー。やべー、これからウチ入院するわーって。あいつ鳥羽さんに連絡くれ
たらしいんだけどさ。それから一日連絡不通。ずーっと。なんか、店も大變らしいよ。
—警察？
—保健所とか。営業内容片っ端からしらべられたっぽい。これも再オープンでき死
いねって。
—軽いの？
—處分？
—コロナ。
—わかんないんだよ。全然。まったく。かんっべき。...心配だけどね。...若干。
でも、と。
息をついて妃奈子は云った。「意外。なんか、すっごい、意外。」
私はまばたく。何を思うとも死い。むしろ出来死い。
他人だから？

4月。履歴で、26日。二番店の、通称専務がLineにメッセージを入れた。——報告があ
ります。今、お時間ありますか？

その片山郁夫はホスト上がりでは死かった。もと、2010年になってから始めたドッグ
カフェの三人目の店長だった。上げた売上自体は大したものでは無かった。人望が売り
だった。人望という言葉には常にいかゞわしいごまかしが匂う。いずれにせよ單純に人
氣があった。客にもスタッフにも。云い方がやさしいのだった。理解者の振りをする能
力があった。わたしは必ずしも信頼して死い死かった。——いゝよ。

—ならします。

聲がくらかった。

すぐに私は察した。

「なにかあったの？ 勘弁してよ、もう。俺も頭痛いんだよ。」

「云いにくいんです。俺も。實際、めちゃくちゃ言いにくいし、言いたくないし、なんか、信じられないんですけど。...いまだに。」

「どうしたの？」

「社長が死にました。」

はっきりと片山はそう云った。

わたしは沈黙した。

「なに？」いいかけて、やめた。

「ほんとに？」いいかけて、やめた。

私はひそかに額に汗をかいていた。

「いま、だいじょうぶですか？」

片山がそうささやいた。半分以上聞き取れなかった。聲があまりにも小さすぎた。

「昨日、東野社長、マンションから飛び降りたんです。」

「幡谷の？」

「奥さん、——夕夏さんって、いましたよね。あの方、前日かな？ 實家に歸らせて。コロナ疎開だよって。」

「彼女、實家、四國だったよね。」

「廣島ですよ。嚴島神社の宮家のなんかで」

「奥さん、」大丈夫？ 言いかけて私はことばにつまった。

片山は察した。

「大丈夫でした。電話では。心の中は知りませんよ。實際の。そうですかって。すみません、ご迷惑おかけして、みたいな。」

「それは、...」痛ましいね。むしろ。すさまじく。言いかけて、ことばにつまった。

「いや、嘘ですよたぶん。もしものことは、まさか、死に思います。」

「こども？」

「ご實家が、謂って、安定してるから、生活はなんとか...でも、」

気持ちがね、いいかけて、ことばにつまった。

「明け方かな。彼、...遺書、あって。」

「なんて？」

「従業員に、すまない、と。お前ら裏切って、悪いと。みんなもう、茫然としてますよ。店、一應、いつも通り開けましたけど。」

「なんで？」

「むしろ、失禮でしょ。社長に。閉めちゃだめじゃんって。何があっても。店は俺らが守るって。あいつら。今まで以上に団結してますよ。」

かわいいじゃん。...言いかけて、ことばにつまった。

「社長にも。遺言に、書いてました。一番最後に。」

「なに？」

私は目を閉じた。

「読みますよ。書いてある儘...最後、社長、最後まで恩返しできませんでした。」

なにか、私は云いかけた。

なにを云いかけたのか判らなかつた。

唇はひらきかけて、唯、ことばをうしなつた自分に我を忘れていた。

「最後、迷惑かけます。」

聞いていた。

「今、社長との思い出しかありません。胸、いっぱいです。あいつのこと、よかつたら、見てやってくれませんか？」

...奥さんですよ。たぶん、と。

片山が補足した聲を聞いた。

「すみません。本等に、申し譯ないです。ありがとうございました。ただただ、ただただ、全部が感謝です。」

聞いていた。

聞いてい死いに等しかつた。以上です、と片山が云つた時、私の目から涙が止めどもなくにあふれたのに氣づいた。そして、それ以前のいつからか、已に涙などとめどもなくに流れていたことに氣付いた。

手がふるえていた。

私の喉が嗚咽にわなゝいていた。

泣いていた。

もはや悲しみさえも感じては居なかつた。

三月終り比。

緩い外出禁止令の中でカフェも何もテイク・アウト以外は受け付け死い。海邊の廢墟じみた家屋の一階に居住者が開いているカフェはお忍びで客を入れた。シャッターはおろしたまゝに、何の悪意も反抗も死い惰性の叛亂が繼續する。稀に訪ねる親しい顧客を入られる。一度に多くて二組、或は多くの時には私以外には客はいない。入れ替わりにいつかだれかゝ入るに違ひ死い。半分だけあけられたシャッターを潜ると三十過ぎの太つた女がいつもの媚を浮かべた。何か云つた。赤裸ゝな現地の言語は判らない。何を云っているのかは判る。——今日も仕事はやすみなんだろ？

私が一本指を立てたのを女の目は見た。

——わかつてるよ。コーヒーだろ？

女は後ろ向きに尻を振りながら支度した。

——全く。

鼻歌をうたい始める。

——誰も彼もいっしょだよ。

コーヒーを淹れる。

——にっちもさっちもいかないよ。

日差し。シャッターの殆どを絞められゝば外の光は編まれたアルミの隙間から漏れ入る以外の光源をなさない。朧な、と。そういうしかない光が侵入して儼う塵をきらめかせ

た。先客が何組かはみたに違いなかった。タイル敷きの床に煙草の吸殻がまばらに散らしていた。Lineを見た。ひますぎて、なんかくるしい。

そのメッセージは樋口芹馨が昨日送っていたものだった。アマチュアのミュージシャンだった。シンガーソングライターを謳って、自分で曲を作って、歌って、CDを焼いて、或いはストリーミングデータをアップして、とはいえ地下アイドル崩れのグッズ販売で収入源の殆どを賄ってゐれば、ライブが出来れば干上がった魚に等しい。

なに、してますか？

アイスコーヒーが光る。

げんきだったら、いいな。

グラスが水滴を垂れさす。

妃奈子が男を連れ込むのを見た。なにともなく顔を上げた時に、海邊の大通りの向こうの端、海を背にして黒いマスクをした女が立ってゐた。黒地の端に筋りの白い印字が見えた。見間違いようもない。キャミソールの彼女は白い、文字通りぬけるような肌の透明感に見事な女の造形を誇示して、そして曝した肌の見せつける不意の濃い黒濁の半身を、アインシュタインもニュートンも、アルキメデスさえも否定した違和感のうちに、そこにだけ深い深夜の鬩りの氣配を侵入させて明るい日差しの直射の下に曝した。おもわずに、私は声をかけようと思った。笑いかけてさえいた。声がとゞくはずはなかった。抑私の喉は大声を張り上げるようにはできていない。耳の至近にさゝやく爲だけにしか。人の聲の大きいのを私は嫌った。大音響ならば、豪雨のそれか雷鳴のそれか土砂崩れの轟音の、無慈悲なそれをだけ愛した。ひとりの人のこれみよがしな聲の大きさは常に醜い。聯なり合った集団屠殺の悲鳴のこだます轟音ならそれでもうつくしいとおもうのだろうか。聞いた が死いで判ら死い。

周囲に目線を繞らす妃奈子は明らかに誰かを探していた。姿は隠しようもなく人目を引いた。惹かれるべき人目など、バイクの疾走さえまばらであれば、實質殆どありはしなくともいづれせよも。現實的に、孤獨。やゝあって、カワサキの白いバイクが止まった。十代後半なのか。いたいけなくも見え死いでも死い幼げな男が乗っていた。正確な年齢など判らない。愛の人間は私には幼く見えるか老けて見えるかの兩極端でしか死い。男は明らかに妃奈子に馴れかけた男のやさしい氣遣いのある媚の繊細を曝す。あからさまで、人目にはたゞいやらしくだけ見えた。妃奈子がなにか云った。ふたりの姿以外にはその一瞬、だれも居なかった。餘にも空虚な大通りに、その溢れかえる日差しのみずみずしさの中のふたつの生き物の姿は無残なまでに孤立していた。妃奈子がなにか戯言に弄んだに違い死い。男が聲を立てゝ笑ったように見えた。大げさな身振りを曝した。日の下に生きて在る。直射日光に秘かに焼き焦がされながら。妃奈子のくちびるが動いた筈は死い。蔑むに近い冷んだ眼差しに男を見ていたのだから。妃奈子は沈黙のまゝに立っていた。長身の男の、バイクに乗りっぱなしで話しかけるのをやゝ上目に見上げて、隠す氣も死い軽蔑と煽情に謎めかされたなまめいた眼付のなまなましさをだけ見せ付けてそこに居た。やゝあって、何を機にしたのかは判らない儘に男の後ろに乗った。ヘルメットは被らない。男の背に身をもたれさせて、抱きしめるように前方の斜めを指さした。あきらかに男を意識した腕がヘルメット越しの、男の頬近くに添うようにものばされて、その先にはすぐちかくの妃奈子の泊まるホテルの在ったを思いだした。

そのときにまで、爰がホテルの至近だという を私は忘れていた。乃至、妃奈子がこの世界に有ること自體考えても居死かった。爰は私の生活空間だった。妃奈子は侵入者に過ぎない。その、しがみつかれた現地住民の男さえも。男はバイクを出した。用心して、だれもない大通りを違法に曲がろうとする。こっち側のならびにあるホテルに行くためには反対車線に出なければならない。車線はココナッツの派手な植栽が何百メートルにもわたって隔絶する。大通りで向こうに進入する爲には、るか向こうの交差点をまがるか歩行者用に狭くあけられたスペースをとらざるを得ない。男は迷っていた。妃奈子が軀を押し附けた。廻した腕が胸をつかんだ。カフェの女が大聲で話しかけた。女を振り返った。私に話しかけたのだと思った。背を向けてスマートホンの画像通話でだれかと話していた。おもわずに、私は聲を立てて笑いそうになった。彼女の視界の中には私は今完璧に存在し死い。女がいきなり私を振り返った。私の爲の笑みさえつくら死い。すぐさまに液晶画面に目を點じて、そして、日本人よ、と。

たぶん、そう云った。

ふたたび大通りを見た時、すでに妃奈子たちは死い死かった。

Line が鳴って、開かない前に画面で妃奈子の、——話したいことがある。そのメッセージを確認したときに、私には厥をその儘無視する氣までは死かった。たゞ單に何の対處もし死かった。すぐさまに呼び出し音が鳴った。妃奈子だった。

——生きてる？

妃奈子が云った。

「死んでる。」

——それ、おもしろくない。

笑った。

——そうとうやばいらしいよ。

妃奈子が云った。

「何が？ パラグアイの三日前の豚肉価格が？」

——そうじゃなくて

「サラエボで流行のスタバのライチ・マキアートにロシア關與の陰謀論？」

——由樹だよ。

聲はわずかにでも深刻さのある覺素振りをなぞるでも死い。まるでもなにもかもきれいに他人 で、その他人 の周邊をうろつく妃奈子の聲は、あるいはその冷酷を耻じ死い。

「死んだの？」

——やめて。そういうこというの。

「どうしたの？」

——やばそう。

「死にそう？」

——やめてよだから。云っていゝことゝ悪い ある。

私が聲を立てゝ笑った儘に、むこうで妃奈子の頬の笑みに歪んだのを氣配がそれとなくに傳えた。ふと思った。

——集中治療室？

彼女が今ひとりでいるとは限らない。いつか

——なんかそういうのあるじゃん。そこにさ

彼女が電話をくれるときには彼女が

——もうずっとはいつてるんだって。

ひとり話しているとしか考えて居なかった。けれども

——鳥羽さんが歎いてた。昨日

いま、彼女は例の若い男をでも、乃至

——そんな話聞いたらしいのね。で、

ほかのだれかをでも、そのかたわらにはべらせて

——病院行って、入院ってなって、それで

例えばベッドの上に身を横たえながらにでも

——二三時間後くらいには一気にわるくなったみたいで、

私と通話しているのかも知れ死かった。思う。

——それからずっと、そんな感じだったらしい。なんか

男の指先が妃奈子の肌をなぞる。いまでも

——面會とかもでき死いじゃん。基本

なめらかなまゝを維持していたに違い死い。その

——隔離でしょ。もう、さ

半面のあざやかな黒の

——やばいね。

妃奈子はそう云った。私は瞬く。——あの子に、もしもの あったら、

「お前、今、何してる？」

私が不意にそう云った聲を、聞いて私は想わず笑いそうになる。「なにって？」

「何してるの。」

「ホテルにいるよ」

「ホテルに？ ずっと？」

「外出禁止とかなんとか言ってるんじゃない？ 店なんて見事なくらいに閉ってるもんね。

日本じゃ考えられ死い。... 厳しいらしいね。爰って。アジアだから？ マスク必須かなんか？ つけてなかったら警察くるの？ ホテルの子が云ってた。」

「お前、ベトナム語なんて判るの？」

「英語だよ。嘘。スマホ。アプリ。」... なんか、歪な日本語になるけどさ、言いたいことわかるんだよね。

さゝやく。

あれってさ、

不用意な程のさゝやき。

こっちの日本語も

耳に、

あんないびつな現地語になってんのかな。

ふれるような、

どうなの？

いびつな。

——何してるの？

やゝあって妃奈子が云った。

その声が、ほんの数秒とは言え私たちが沈黙していたことを思いださせた。

「俺？」

——おれ。

「なにもしてないよ。暇なとき、...」

——なに？

「女か男抱いてる。」

妃奈子は聲を立てて笑って、——相変わらずだね。

云った。

4月23日木曜日、ダナン市の外出自粛勧告が終了した。21日にはテレビで通知していた。私はヤンに電話した。——終わっらしいね。

まだゞよ、と。ヤンは甘えた聲を立てた。

「うそ？」

「学校とかは、全部、まだゞよ。」

「いつ？」

「わからない。けど、まだ、ひまだよ。」

遠回しにヤンは私を誘っていた。一度抱かれて仕舞えば最早、ヤンは已に私を自分の男としてだけ見出していた。いまさらに。いまゝでも、指にわずかにだにふれられ死いませからヤンは私を自分のものに想っていたはずだった。瞳孔の開いたまなざしと、意図的に逸らされる視線がそれを赤裸々にした。聲の邪氣の死い素直さが彼女の、自分が誘っている自覚の死いことを明かしていた。

「なにしていますか？」

ヤンが云った。

「山代先生と逢った？」

彼女がさゝやく。聲に猜疑の色を忍ばせた。逢って死い。ヤンさんは？

「昨日、Lineで話した。暇だった。今、日本だよ。」

山代という四十の女は日本語の教師だった。ヤンを紹介したのは彼女だった。山代が私に気があるのはヤンにも誰にも透けて見えた。ヤンはいまさらに女に嫉妬していた。

「歸りたい？」

ヤンが云った。

「歸れ死いよ。」

「なんで？」

「二週間とかなんとか。いろいろ面倒じゃない？ 飛行機って、出てるのかな？ 未だに。」

「もう、倒産しそうだよね。」

ヤンは笑った。「でも、いゝんじゃない？ 貯金あるよ。みんな。お金持ちだから。」

「どこにも行けなくなっちゃうよ。」
「どこか行きたいの？」
不意になじるような色をもつ聲。
「ベトナム、嫌？」
「嫌じゃない。」
「日本の方がいゝんだよね」と、——お前なんかもう飽きたんだよ。そう謂われたかのよ
うに、「日本人だからね。」あからさまな翳りをさらし、「でも、日本、あぶないよ。」
ひそめる。
「何人、亡くなったの？ いっぱい…」
「感染者、一万人超えたとかなんとか」
「やばい。それ、ひどい」
つぶやく。
「もう歸れ死いよ。あぶないから。きのう、日本から歸ってきたベトナム人、二人コロナ
だったよ。」
「留学生？」
「實習生。いま、ベトナム人いっぱい歸ってきてるよ。日本から。」

三月五日の朝に、血まみれのユエンを聯れ込んだのはチャンだった。
朝起きて庭のシャッターを開けた時に、庭のブーゲンビリアの樹木の下にチャンは野ざ
らしの赤いプラスチックの椅子に腰かけてスマートフォンを弄っていた。シャッターを
開ける時にはその派手な騒音に已に気づいていたに違い死かった。うつむいてしらを切
り通した。わたしが聲をかけようとした瞬間に目を上げた。——居たんだ。私を見詰め
たまゝに素直にわらって、掌にスマートフォンをにぎしめたチャンは頸を傾げた。水を撒
かれたのか。庭が晴た空の下濡れて黒ずんでいた。待っているくらいなら、いつかのよ
うにシャッターを叩き鳴らすでもなんでもすればよかったのだった。早朝、いまだに7
時ぐらいの水曜日の朝に、チャンが當分そこでシャッターの開かれるのを待っていたら
しいことはそれとなく察された。広い庭はもと大通りに奥まっていたせいで、もとも
との家屋の群れの、誰かしらにうりさばかれて立ち去られた更地をさらしても猶も、庭
の樹木は人目を遮った。静かだった。そしてもともと静かだった。Covid19のせいで、い
よいよ庭は静まり返った。庭に出て、彼女に歩み寄ろうとしたときにチャンが、それ
を遮るように左をゆびさした。

微笑に邪気は無かった。今、誰も遣っていない離れの影に全裸の少女がうずくまって抱
え込んだ膝に顔をうずめていた。目を凝らした。ユエンに違いなかった。立ちあがった
チャンが自分の頸を絞める仕草をして、そして顔でだけ笑った。聲はなにもたた死い。
庭先のホースで水浸しにされたに違いない少女は自分の周囲を乾かない黒ずみに満たす。
水の匂う氣さえした。濡れた肌に水滴がきらめいた。晴れていた。いかにも私の妻めか
して、チャンが私の胸に体をうずめた。胸の中で十九歳のチャンはスマートフォンを相変
わらずに弄った。

四月はじめ。

カフェに行ったとき、珍しく先客がいた。尤も客とよべるのかどうかは知らない。カフェの三十女とレジ臺で話し込んでいたのだった。女がいつになく色のついた眼差しに媚を咬み込んだ笑みを呉れた。私が指を立てる間も死んで、オッケー、オッケー、と云った。日本人だよ。

女にそういわれた男が大げさに驚いてみせるのを私は見た。

あの先進國のうつくしい日本?...乃至、封じ込めに失敗した意味不明な後進國の?...乃至、劣悪汚染大國日本?...乃至、大丈夫? こいつ感染して死い?

席に座っていた私にコーヒーを給仕したのはめずらしく、その男だった。男は下僕じみた媚を浮かべた。奴隷じみた。ふと気づく。それは男の性格でも時に日本人が思う日本人の優位性でもなんでもなくて、接待にも接客になれていない故のいびつさに過ぎない。ヘアカットの素人がどんどん必要以上に刈り込んで收拾をつかなくしてしまうような。つまり、加減が出来死い。いつか誰かが云った。日本人って、尊敬されてるんだね。思いだして、私は笑いそうになった。——みんな、すごい氣遣って来るんだよね。目の前の男はほとんどしどろもどろになって、必死に媚の過剰を盛った。零れ落ちても盡きない程に。むこうのレジ臺で女が片肘をついたままに大声で笑った。

男がなにをいっているのかは判らない。派手に笑いながらなにかつたえようとする。煩わしすぎて、私が適当に相槌を打った時、Khong hieu そう云った。疑問形だった。氣配がつたえた。——判ってない?

男が殆ど軽蔑じみた眼差しに笑った。

——判らないよね。

じゃ、見せてやるよ、と。そう云ったに違いない。脇に挟んでいたスマートホンを差し出して、指を一本鼻さきを立てた。画面を私の目のまえに曝した俛に、いかにもやりづらそうにみせながら、男は操作した。Zalo という現地の Face book のようなアプリから、苦勞して何かのシェアを探していた。私は飽きた。立ち上がるきっかけも何も、コーヒーには唇さえふれて居なかった。一氣に飲んだ。——これ。

と。

「これなんだよ。これこれ。」

男はそう云った筈だ。或いは、糞。豚野郎のジャップの糞野郎とでも?

「見てくれよ」——ぶっ殺すぞ、カス。

男の笑い顔を、彼の差し出す目の前の画面が覆い隠す。

「すごいだろ?」——死ねよ、千回ぐらい。

画像には股を開いた全裸の女が、恐らくはベトナムのホテルのベッドの上に身を横たえていた。うつくしい女の半身は、空間をそこにだけ夜に捻じ曲げたような黒い鬚りが覆う。

「ね、これ、日本人の女だよな?」——アフリカって雪、降るの?

妃奈子。

「すごいよね。... どう?」——豚が昨日百頭死んだよ。

東南アジアで、基本的に所謂ポルノは法規上も倫理上もご法度に近い。極端に云うとアジアの中で日本だけがあからさまなのだった。そんなことは知っていた。男は希少な珍寶でも見せるようわたしに見せた。腰をゆすって、その行爲を暗示させながら下卑た、あけすけな笑い声を立てた。乾いた聲が響いた。男は無邪氣だった。此の女、ダナンにいるんだよ——明日、と。世界は滅びます。男は云っているらしい。涙を。

私は男を、——滂沱の、指さした。

涙をながしながらに明日世界は、

「お前は？」——昔僕らは

笑う。

「お前も、したら？」——蛆虫だった。

男は頸を振った。「まさか」——ぶっ殺す。

大げさに、まるで、私なんかとても、と、——お前らみんな、ぶっ殺す。云うかの様に。

私は聲を立てて笑った。

丸裸のユエンを家に入れてやった。チャンはミーの家で、もはや自分の家のようにふるまった。ミーを送迎バスまで送って歸るとミーのサイズの合わない服を着たユエンが朝食づくりを手傳わされていた。ユエンにできることは傍らでチャンの支度を眺め、そして突っ立っている程度に過ぎ無い。フライパンが音を立てた。云われて、流水で解凍している鳥賊をビニール袋ごとにユエンが持ってきた。水滴がしたゝった。チャンが派手な声をあげて罵った。ミーはすくなくともその時には、明らかに無能だった。庭に出て、離れの前に抛り棄てられたまゝのユエンの服を見た。血塗れだった。ユエンには傷一つ附いて居なかった。他人の血だった。觸れるのをためらった。想えば血に、いくらの穢れ、と。私たちがそういう生き物の群れが今何種類繁殖しているのか知れ死かった。血は乾きかけて、更に水に濡れ、あげくなにもかもが台無しの蒸れた汚濁に過ぎ死かった。新鮮な血は旨い。例えば屠殺直後の鶏の。私は目を逸らした。庭のブーゲンビリアが變らずに紫の色を盛らせて日を浴びた。

自肅勸告、——乃至戒嚴令の前、かの女の非番の木曜日に何度か逢ったヤンは、その度にいつも茫然とした眼差しをさらした。わざと私を直視せずに外れた視線の翳りに私を見つめ、私の視線に耻と恍惚に溺れる。家畜じみて、無抵抗で、被害者じみて、いためつけられる被虐者じみた、それ。

なんども見た。女たちのそれ。もう、と。

傷つけないでください。わたし、このまま死んで仕舞いますよ。

戀という感情。

肥滿に近い小柄に汗くさい肉を息づかせた。

旧正月の前に逢ったとき、川沿いの大通りのカフェで、——いそがしい？

「今年は、そんなにいそがしくないよ。」

答えるヤンは一度私を見つめて、悟られないように斜めに目を逸らした。其の儘に

「なんでかな？」

私の傍らの背後のなにをも見ずに

「みんな日本に行きたいけど。」

私の氣配を見つめ続けて

「在留資格、難しいからね。」

開いた瞳孔に好き放題に

「でも、貰った子、いま」

ものゝ形の感謝した白濁を

「いっぱいゝる。来年」

きらめかせて

「いくよ。」

潤う。

肉の厚い唇を真紅の口紅が塗りたくった。潤いの反射のこまやかな白濁。

店には外国人が多かった。相變らずの韓國人も。ダナンに、韓國人は異様に多い。

「なんで韓國にし死かったの？」

云ったわたしを我に返ったヤンは見た。一瞬あわて、「留學？」

聞き直し、

「中國とか」

「遠いよ。」

私は笑った。唯の話の間でも、最早ヤンは私に抱かれているのも同じだった。少なくともヤンの中で私たちはかさなりあって、濃厚以上にふれあっていた。見の前で女に自慰されている氣さえする。その眼差しがいつも茫然とする。

ヤンは私を見詰めた。見つめた自覺は無い儘に、やがて同じように逸らされた。かすかに開かれた唇が息遣った。午後の四時半。

背中で男聲と女聲の韓國語が聴こえた。罵り合うような聲だった、何を話しているのかは知らない。

東野夕夏と連絡を取ったことは一度もなかった。夕夏から初めての通話が Line で入った。しっかした聲だった。

彼女が云った。

「社長には、秘密にはしておけない事が在って。」

事件を知った、二日後の午前。7時過ぎ。彼女にとっては9時過ぎ。そんな頃合いか、と。ふと思う。晴れ。かの女がどうかはしら無い。形通りの弔いの言葉をかけようとしたときに、彼女はそう云った。

「秘密があったんです。...ね。克己に。」

「秘密？」

「代々木上原のお店、ありますよね。」

「ありますね。」

「あそこに、... お名前、忘れちゃって、タカシさん、かな。そういう元従業員の方がいて。」

「實務、全部東野君にまかせていましたんで、すみません。ちょっと私も把握し切れてないんですが、...」

「そのかた、ちょっと前、亡くなったんですね。」

「そうなんですか。」

「流行りの、あれで。」

私は言葉を失った。

「それで、彼、入院する前に一回店に来てみたいなんです。久しぶりに顔だして。古參のバイトだったみたいで。今の社員さんたち、だれもご存じなかったみたいなんですけど。店長の、」

「松山？」

「...さん、かな？ わたし、ちょっと、委しくは。...でも、その方から連絡受けたいみたいで。そのこと。もと、同期だったみたいで。タカシさんと。影山さん。」

「松山？」

「店長さん。でもいそがしくて話なんかできなかったよって。それからすぐ、その元バイトの方、入院して。一週間くらい？ 二週間くらい？ 亡くなったの聞いたらしくて。」

「いつの話？」

「いらっしやったのは、たぶん二月のいつか。月末かな。亡くなったのを東野が知ったのは、たぶん三月の半ば。でも、病氣が病氣でしょ。一回、店長さんには極秘にさせたいなんですね。云うなって。だれにも。」

「保健所入りますからね。」

「急に重症化しちゃって、それから入院したのかな。もうほんとに、意識もうつろな感じだったらしいですよ。もちろん、また聞きなんですけど。なにもかも。」

「保健所にも嘘ついた？」

「來なかったんじゃないですか？ 意識もまともじゃなかったらしいから。移動場所とかは本人からは何も。たぶん。でも、三月の末からじゃないですか。日本で擴がったの。」

「Covid？」

「たぶん、いろんなこと思ったと思いますよ。克己も。」

「でも、秘密にした。」

「店長さんと一緒に。云ってたんです。もうしかたないじゃんって。死んじやった人、感染した人はそうそれはそれだよ。俺、今、まもれるやつら、まもるから。健康だけでいきてんじゃないんだよ、金も喰って生きてんだよ、俺たち、とか。——間違ってますよね？」

「そうとだけとも云いきれないんじゃないですか？ 必ずしも。」

「卑怯でしょ。」

「そうとだけともいえない。」

「偽善。」

「それだけともいえない。」

「自己欺瞞?...自己満足。自己正当化。結局誤魔化し」

「いや、かならずしも」

「政治家みたい。社長さん、まるで、」

東野の妻が鼻に笑った息を立てたので、私は想わずに我に返った気がした。

「日本の。つかえない政治家。」

「民主主義者なんですよ。私。ニューヨーク・シティ並にダイバーシティ優先で、人々の意見の調停役なんです。強権は發揮せず断定はし無い。」

「まちがいなんです。もう、ぜんぶ。夫のやったこと。」

不意に、此の女こそが東野を追い詰めたのだという気がした。

「死んで...なに？ せめても懺悔?...したのかなって。」

此の女が東野を殺した。

「なんか、」

と。

一度口ごもって、ふたゝび女が何か云いかけた。

言い淀んだ。

いきなりにその息が震えた。

「...せつなくて。」

ようやくそれだけ言った。

涙聲だった。

私は目を閉じた。

「お悔やみを申し上げます。俺、なんにもでき死かった。」

スマートホンの向こうで女が泣き崩れた。

「きれいな程何も。」

私は女が電話を切るのを祈るようにも待った。

4月26日、ハオ、——Hauの夢を見た。彼を後ろ手に縛り付けているのはわたしだった。文字通り滂沱の涙をながしながら全裸の彼を膝間附かせて後ろから、へし折れそうにもその華奢な長い両腕を縛る。突き出された尻が拷問の跡を赤裸々に、赤らんでそこにさらしていた。それが邪魔だった。邪氣も無く笑いながらハオは私に救いを乞うていた。

——明日は雨だよ。

何も答えずに私は彼を屠殺しようとするのだが

——カンボジアとスカンジナビアで。

腕を軋みそうな程しぼりつゞけて有る の痛ましさに

——明日は霰だよ。

現在進行の屠殺の赤裸々な痛みが

——バグダッドで雷が鳴ったよ。

かれの背骨を逆向きにのけぞらせて

——北京に今年の雪はない。

吐かれる彼の喉の息の音を

——プノンペンが雹を降らせたのに。

私は聞く。耳をすませて

——霞むピョンヤンは晴れた。

ハオが聲を立て、笑った。明らかに骨折した頸がわたしを振り向いていた。その目をみてはいけない気がした。素直な笑みに、黒目の反射の白濁の斑が散った。眼を覚ました時、躰の上でミーがほ、笑んだ。夢を見ていた私を見ていた。覆いかぶさったその髪が匂った。

首と胸の皮膚の表面をくすぐる。

悪意など無い。

明け方。

空はいまだくらい。

ミーの肌が汗ばんでいた。

4月19日。

姪っ子の世良暁から Face Book に電話があった。「元気？」

私は聲を立て、笑った。

「なによ。どしたん？」

暁が一瞬沈黙して、臆而たじろいだ。

「どいつもこいつも最近、電話くれるんだよ。」

「ひまじゃけえな。」

「で、どいつもこいつも云うんだよ」

「なんて？」

「元気？」

一瞬間の間が在った、その穴にでも落ちた様な、顯かに暁は不快に思ったらしかった。京都かどこかの専門學校に行った。彼は。オートバイの技師になった筈だった。うろ覚えでしか無い。退學したかもしれ無い。轉職したかもしれ無い。今、何の仕事をしているかは知らない。少なくとも総理大臣にはなっていない。何年か前に結婚した筈だった。

「話が有るんじゃけど。」

廣島に在住だった。

「コロナ？」

生まれたのは岡山だった。

「察しがええの。」

私の父親の妹の三人産んだ息子の末だった。

「莞爾さんが、入院したで。」

それは私の父親の名前だった。

「いつ？」

「昨日、美也子叔母さんから電話貰うたが。」

それは私の母親の名前だった。

「莞爾さん、脳梗塞で倒れてからにデイ・サービスに行きようたらう？ あそこで、クライスターあったらしんじやなが。」

「クライスラー？」

「コロナじゃなが。それで、あやしいゆうて、調べたら熱があって、」

「何度？」

「7度5分とか。発熱は大したこと死んじゃけど、...まえからよく熱、出しようたん？」

「かもね。なんか、そうだったかも。」

「糖尿も有るんじやろ。」

「それは知ってる。」

「美也子叔母さんは陰性じゃいうて。けど、様子見で自宅待機されとるいうて。叔母さん
とも、病気が病氣じゃから見舞いにもいけんじやろ？ 俺ら。」

「なんで？」

「いや、そうじやろ。普通の病氣じゃないんで？ 知っとる？ 防護服いるんで？ 原發み
たいな。」

「で？」

「どうするん？」悪い、と。

私は云った。何か、變りがあったら連絡くれよ。

云う。

「えゝで。」

歸って來れない？...と、云ったその切れ目も無く「歸れんよな。コロナじゃなからな...」

暁は獨り言散る。

「お前は大丈夫？」

憎しみ。

父親から強姦されるにも似て加えられた日常の暴力を私は、——それが世に謂う虐待と
いう深刻で悲惨で同情すべき事態であることに氣附いた十九歳のときから、かれ等を赦
したことは死かった。

母親はそれが虐待であった事實に未だに氣附いてい死いに違い死かった。

泣き叫ぶように。

聲、——あの小柄な父親に、私の代わりにその不始末を侘びていた彼女の聲が、「赦し
てやってえ、」なにも具體的には思いだせない儘に「...な。」忘れられない。「もう赦し
てえ...」...矛盾している。笑って仕舞う程に。

十四歳から家出を繰り返した。

十九歳で歌舞伎町に流れた。

三十過ぎまで連絡を付け死かった。それからも殆ど交流が無かった。三十の時、實家の
置き電話に十何年振りに連絡を入れたのは東野が云ったのだった。——向き合った方が
いゝですよ。

「社長、逃げ死いで。」

その時には、実際にはもはや

「ちゃんと、過去と、向き合って。」

憎しみは死かった、とっくに

「大丈夫。」

あこのろの問題は

「社長、強いから。」

他人の問題に過ぎない無関係さをしか曝して居なかった。

日返りで實家に歸った時、見たことも無い他人の家族がそこにゐた。

父親の建築会社は倒産していた。母親が飲食店のアルバイトで生活を支えた。

ごめんね、連絡し無いで。

母親はわびた。

なにごとくも死かった様に笑んだ。

出来るはずも死かった。

連絡など、抑携帯電話の番號もなにも教えてい死かった。

かつての家には曉たちが住んでいた。だから、電話には彼等が出た。彼の姉が私に両親の居所と連絡先を言い附けたのだった。

一晩もいないことを父親はかるくなじった。

私も微笑んだ。

やさしく。

土産の東京バナナが母親に喜ばれた。

父親は味が薄いと云った。——あっちは上品なんじゃの。

彼は母親と笑った。

わたち達は誰もがやさしかった。

4月。

ふれあおうよ、と。

妃奈子が云って、やゝあって笑った。悪戯じみたその音聲を聞いた。話があると呼び出されて、顔をだした四月の初めの金曜日に部屋のドアをノックすると妃奈子は中から、——熱ある？

云って、笑った。

「あるよ。」

——まじ？ 何度？ 何日間？

「36度ちょっと。毎日。」

ドアを開けると妃奈子はどこから入手したのか、あくまでも日本製の除菌クリーナーで私のふれたドアノブを拭った。

「こゝ、どこ？」

「私の部屋。」

「ニューヨーク？ ヴェネチア？ トルコ？」

「笑えない。」

冗談めかしながら、結局は妃奈子がもはや恐怖でもなんでもなくて日常のとるにたらない些末な習慣として、それをやっているらしいのが目にとれた。——冷たい奴だね。

妃奈子が云った。

「なんで？」

「人が死ぬのが、どんなに大変かわかって死いの？」

「死？」

「どんなに、悲しくて、苦しくて、切なくて、救われなくて、報われなくて、」

「関係ない。」

「冷たい。」

「お前が死んでも、俺は死ね死い。俺には関係でき死い。」

「形而上學的に誤魔化さない。...やっぱ、冷酷なんですよ。」

ささやく。

「心の中絶対零度で、結局せゝら笑ってるの。」

「ベトナムじゃ関係ないよ。どこにパンデミックってるんだよ。だれもかれも大げさにやってるけど。...あれ、國民性なのかな？ 死とか、疫病とか、そういうの、極端に恐れてる。」

「日本人だってそうだよ。」

「だったら俺は日本人じゃ死い。」

「由樹が死んだらしい。」

そう云ったときに妃奈子は窓を背にした私を見ていた。逆光の中に私の立姿を見ている筈だった。眼を細めていた。光のせいで死かったかもしれ死い。何か、感情らしいきものゝ、なんだか、何か。妃奈子の眼差しはたゞ茫然とした色をいまさらに、いきなりに曝した。その唐突さの赤裸ゝに違和感が在った。私はなにか言いかけた。何を云いかけたのかは知ら死い。なにも云いかけたこと葉などなかった。私は沈黙した。

「逢ったこと、あるよね。」

小柄な女だった。

「なんかね、集中治療室？ 入って。それで人口肺？ なに？」

存在感がないという存在感をいやらしいほどにさらした。

「あれって、胸裂いて機械取りつけるって なの？」

言葉もすくなくて、微笑む以外の笑い方など知ら死い。

「そっちのほうがあぶないんじゃないの？...知らないけど、」

聲を立てて笑ったのを見た記憶がない。

「なんか、毎日輸血みたいなのするの？ 肺に？...なにそれ？」

記憶には嘘がある気がする。慥かに

「すぐだよ。もう、...三日くらいで死んだらしいよ。」

いつか彼女は

「なんで？」 妃奈子が云った。「なんで、あの子コロナなんかで死んじゃうだろ？」

「仕方ない。」

「救いようがない言い方だよね。」

「じゃ、救いなんか死いんだよ。」

「だから冷酷。」私のすぐ傍らにまで添うて、「血も涙も死い。コロナと一緒に。」私は聲を立てゝ笑った。その舉動には違和感が在った。あるべき舉動を考えた。思い附かなかった。妃奈子がわざと鼻をならして私の匂いを嗅いだ。——匂うよ。

さゝやく。

「何が？」

「病気の匂い。」

「ウイルス？」

「悪人の匂いも。」

「おまえもとっくに感染してるよ。」さゝやく。「匂い、嗅いだから。肺の中、俺のウイルスで已に壊滅状態。」除菌してあげる、と。

妃奈子は云った。——入らないで。

「ね。」

きたないまんまで私の部屋にはいらなくて。

「ね。」

きたないの、もちこまないで。

「ね。」

わたしまでけがさないで。

「ね。」

なにもかも、みださないで。

「ね。」

わたしのせいかつ、かえしてよ。

「ね。」

わたしをだけはきずつけないで。

「ね。」

みんな、しあわせになって。

「ね。」

わたしもしあわせだから。

「ね？」と、なんで死ぬのに生まれるの？ 妃奈子に連れ込まれるままにシャワールームに入って服を脱いだ。素肌を曝した。いまさら耻らいも何も死に。妃奈子は私のからだなど何度も知っていた。何人も、女はわたしの素肌を見た。何回も。私も。やゝあって裸になった妃奈子がシャワールームに入って、壁に手を付けて、臆而云った。

「後ろ向きになって、お尻付き出して、壁に手を付けるの。」

シャワーの、いかにもリゾート・ホテル仕様の歪な平べったいノズルから水が飛び散って、好き放題に飛沫を亂す。頭から熱すぎる程の温度の湯を、私に浴びせた。背中に。頭に。太ももに。腕に。尻に、容赦もなく叩きつける水流が湯氣をまわらせて、周囲が霞を知り、散りみだれた飛沫は妃奈子をさえも水浸しにしているのが、閉じた目のむこうにも判った。

「みんなにやってるの？」

私はさゝやく。

「みんな？」

「つれこむおとこ、みんな。」

口を開くたびに水が口の中に撥ねる。時々息をとめて飛沫をやりすごす。身をのけぞらす。——動かないで。妃奈子がつぶやく。——消毒、まだ、

「いないよ。」

妃奈子が云った。

「嘘だろ。」
「あんた以外、誰も連れ込んでない。」
「まさか。」
「きたないじゃない。ベトナム人なんて。みんな、コロナ持ってるよ。」
「累計、日本の一日の感染者数程度だよ。」
「誤魔化してるんだよ。」
不意に妃奈子は後ろからしがみついて、私の胸を掌に拭った。
「ほんとはもう、みんな滅んでる。」
ひたすら穢れを洗い流す様に。
「じゃ、日本にかえれよ。」
「なんで？」
「あっちのほうが安全なんだろう？」
「最低の國。」
「イタリアほどじゃない。」
「誤魔化してるんだよ。」ノズルが床のタイルに鋭い音を立てた。抛り棄てるように、ノズルを投げたのだった。逆向になったそれが夥しい水流を全力で噴き上げた。なにもかかも水浸しになった。——まざりあってるのかな？
妃奈子は云った。「わたしたちの、きれいなものもきたないものも、」
——覚えてる？
「みんな、みんな、ね」
——はじめて逢った時、お前
「いま、ぐっちゃぐちゃにまざりあってるのかな？」
——自分の名前と出身地
「それともあらいながされてるのかな？」
——嘘ついたでしょ。慥か、
「きれいなみずに、…ね？」
——沖縄出身の我喜屋美奈ですとかさ。
「みずってきれいなのかな？」
——覚えてる？ お前、店来た時にさ、
「みずってなんなの？」
——嘘つく必然ないじゃん。たゞの
「しよせん、海と雨でしょ。」
——客じゃない？ あれ、
「なんで、かたちがないの？」
——なんでなの？
「いきものってさ、どいつもこいつも」
——なんで、弓削妃奈子じゃだめだったの？
「みずだらけじゃない。でもさ」
——あのとき、お前
「なんで水だけいのちがないの？」

——覚えて死い。云って、妃奈子は最早笑いもし死かった。ベッドの上に私のうえに体を覆いかぶせて、横たわって、私は彼女の背中をなげた。妃奈子はいつも満足したのかしていないのかわからせなかった。むかし、奉仕されているのになれていないだけなのだと思った。恐らくはそれは間違いだった。死んだ田村由樹子はもっと素直だった。妃奈子は終わっても、じゃれつくでも死くたわむれるでも死くて、たゞ、抱きしめて放さ死かった。私に執着している気配は感じられ死かった。よく、こんな子がこんな仕事してるねって、いわれるんだよ。

由樹子を紹介した時、「...この子、」妃奈子はそう云った。

「...らしいよ。」

その歌舞伎町の風鈴会館の一階の喫茶店で、勤務終りの午前八時に、朝の光はすでにきつかった。おそらくは夏だったに違いない。由樹子は見事に、そこにいるのかい死いのかわから死いくらいにおとなしい子、という、そんな存在感に餘にも忠實すぎて、むしろ妄想じみたフィクションにさえ見えた。その時、出逢ってふれ合ってまだ一か月にもみた死かった妃奈子は、今よりもいつよりも私に固執していた。見れば判った。いつでも瞳孔のひらきかけた目で、譬えば遠くの信號を見る時にも傍らに私の存在を、かの女の視野の不在の中に見つめていた。それ、習性のように女たちがいつでも曝す流儀。自分も焦がれた私に由樹子が焦がれない筈も死かった。妃奈子もそう思って居た筈だった。紹介して、ことさらに彼女を褒めてやる軽蔑じみた讃辞のあたりさわりの死さの間にも、明らかな猜疑と嫉妬を眼差しと口元に曝した。「この子ってさ、」...と。

「純情すぎるの。だから、全然氣が利か死いの。」

「そうでもない。いゝ子じゃない」

「好きなの？」短く云って、咎める色を隠しもせず、その咎めた相手がむしろ由樹子でこそあることも又隠さ死い。妃奈子は虐待しているようにも思えた。乃至は自虐。

「ほんと氣がきかないよね。ゆっきー。この街のVIPだよ。めっちゃ有名な人だから。ちゃんと連絡先くらい貰っときなよ。」

そのときには私は歌舞伎町のホストクラブを二店舗経営していた。實態は加藤連合の企業舎弟が金をなにかしらとかき集めて、売り上げの三割近くを持って行って、實務はそれぞれの店の社長がやっていたのだから私は単に名目貸しにすぎ死い。昔この町で名前の知られたホストだった。90年代だった。おそらく今や誰も覚えてい死い。考古學上の發掘の対象に過ぎ死い。去年チベットの白亞紀の地層から小悪魔アゲハという旧翅類の化石が發掘された。私は目を逸らした。妃奈子は一瞬だけ歎く眼差しを投げた。なにものをも咎めずに、たゞ。わたしは傷を負う、と。傾斜する道路沿いにある店は半分以上を中地下に置いた。窓の外に見上げる路上に、酔いつぶれたホストがうつぶせに倒れ伏して呻いていた。所謂急性アルコール中毒を起こしているのだった。ほうっておけば死ぬかもしれない。生き残るかも知れ死い。

頬の右の方に、ふいにわらった氣配がした。

由樹子を見た。

笑顔ひとつ浮かべるでも死い。

私があんいというでも死く見つめると、思いだしたように由樹子は云った。——Line、つながってもいゝですか？

次の日の仕事おわりに呼び出された私は由樹子を抱いた。

4月23日木曜日。ダナン市の外出自粛勧告が、——實質的なゆるやかな戒厳令が、解かれて私は早朝にハオのダナンの外れにある家に行った。同性愛者で在る事を隠さない長身のハオと戒厳令終わりのパーティでもしようと思ったのだろうか。ビールのひと缶くらいは空く筈だった。此処はベトナムだった。機會さえあれば昼夜問わずに宴会の掛け聲と開けた缶に鳴る炭酸の音が響いた。私は酒が嫌いだった。かつて飲み盡した。あるいは飲ませ盡した。いまさらに呑みたくて飲む酒などなかった。バイクを飛ばした。町はすでに活気を帯て、殊更のパーティをするわけでは死くとも祝祭めいた雰囲気の中で、かつての日常の再来を丁寧に且つ慎重にかたどっていた。だれもかれもがまだ、かつての生活に馴れきってはい死いようにも見えた。想えば一か月ぶり、...一か月半ぶりくらいなのだろうか。

ハオは慥か二十九歳だった。来年三十になると去年の暮れに歎いていた。誕生日は9月の何日かだった。あるいは、数えで云ったのかもしれない。いずれにせよ5年間日本で生活した。二年前にベトナムに歸ってきた。日本の貧乏出稼ぎ員は、いまやダナンの外れに家を建て、自分一人で住んでいた。両親は死んでいた。ほかの親族とは絶縁状態だった。つまりは身寄りのない人間なのだった。日本人と一緒に。そう云った。身寄り死いよね。みんな。日本人。全部、ひとり。ベトナムではいまだにめずらしい身の上ではあった。空港へ迄続く大通りを走った。いまだいくつかの店舗は閉められたまゝだった。或は二か月近い閉鎖期間中の掃除におわれているのかもしれない。鼠が住み着いて、彼等の居住空間を己に構築し、好き放題に荒らしまわった後に違い死かった。それらは街路樹の知った事では死い。樹木は相變らずに緑の葉を曝した。赤裸々なほどのいつものおりの色彩。空が青かった。晴れていた。混むという程では死い。バイクの数も、車の数も、人の氣配の数も、なにかもが昨日までとは違った。

臆而工場が亂立し始めるエリアのすぐ手前にハオの家は在った。これから開発を懸けるということなのか、手つかずの更地の廣大なひろがりのところどころに新しい家と、立ち退かなかった廢墟じみた舊家のひろげた雑貨屋や、飲食店が散る。見晴らしがいく。基本的には更地しか存在し死いからだ。草が茂る。このまま放っておけば、いつか樹木さえもがしげって元の森林の海の中に包み込んでしまうに違い死かった。海の向こうの大陸の密林の遺跡群のように。近場のカンボジアのそれのようにも。

派手な家とは言え死い。日本で働いていたベトナム人の建築技師に日本風に作らせたのだと云った。どこが日本風なのかは私にはわから死い。ベトナムによくあるコンクリート造りの——あるいは、鉄鋼を入れている、ということだったのか。...變りばえの死いベトナム風の家で、奥に長く、三階だてだった。一人で住むには廣すぎた。これから、ふえるからね。ハオは云った。「すぐ、せまくなるよ」知りあって一年間、誰も増え死かった。誰も増やす氣も死く、これからも誰も増えない筈だった。

ハオに連絡はしなかった。日中ならどうせいつも家にいた。出かけるのは夜だけだった。昼はパソコンを弄っていた。貿易関係の仕事してる...自分で。そう云った。「もう、雇われるの、いやだよ。だから、俺、獨立したよ。」なんの貿易でいかなる貿易なのか私に

はわからなかった。いずれにせよ生活は潤っていた。夜遊びに明け暮れる以外に金の使い道などなかったにしても、彼に何ら不自由はなかった。

長身のハオの痩せた軀を思った。薄く張った筋肉はその腕の中で心地よさをだけ与えた。骨格がひそかに痛みを感じさせた。痛みなど纔にも、皮膚のどこにも存在しては居なかったにはしても。

更地に囲まれたその家の前で電話を掛けた。出なかった。バイクを降りて鐵の白塗りの門にふれた。指先にそっと。も死げにひらくのを、とりたてゝおどろきも死く見る。鍵はかゝって居なかった。庭という程のものでは死い。數歩ですぐに家の入り口になる。ベトナムの家屋の定型で、一階のリビングはバイクを収容するガレージをも兼ねる。ドアは空いていた。必ずしも不用心だとは思わ死かった。かならずしも治安はいゝとは言え死い儘に、決して悪いとも言え死い。耳にどこかで空き巣に入った話が入る。それは自分ではない。そうやって普通、何も死く生きていく。家に入った。人の氣配が死かった。ハオの名前を呼んだ。返事は死かった。自分の聲の響くのを聞いた。この國でも靴は脱ぐ。素足で床のタイルに觸れる。色は白。突き當りの臺所に行った。ハオはい死かった。傍らの照明のついていないバスルームは確認し死い。一階の中央に螺旋階段がある。手摺は死い。目にも危うく、その意匠は好きになれ死い。ハオは氣に入っていたのかもしれ死い。恐らくは高額の板木を鐵の骨組みが瀟洒に支える。二階に上がった。部屋は一つしかない。すべてぶち抜きの一部屋、ベッドが窓際にある。そこでいつも彼は私を、乃至、私は彼を抱いた。或いは彼の、——乃至彼を、見そめた誰か他の男を。窓のその逆光の中にハオはぶら下がっていた。何も着てい死かった。首を吊っていた。通り沿いのスペースのちょうど真ん中だった。天井にくぎを數本打って、それに衣類を引き裂いて作った紐に頸を突っ込んで、そしてへし折れたように上を向いていた。紐の結び目が頸にあった。後ろに在ったものが、暴れた四肢が前にずらして彼を窒息させたのか。骨が折れているのかい死いのか。私は確認し死かった。軀内の汚物の匂いがした。大量に汗をかいた後の氣配が肌にあった。氣のせいかもしれ死かった。目を見開いていた記憶がある。本當かどうか確信は死い。私は彼の、全裸を曝した死體を見ていた。なにも見てい死いに等しくも、にもかゝらずはっきりと。意識に混濁は死かった。むしろ冪えた。腕が後ろ手に縛られていた。頸に同じく、Tシャツの布地を引き裂いて作った出鱈目な紐で出鱈目に縛って。自分で苦勞して結んだに違死い死かった。何を足場にしたのか、佇いた足元の周辺にはなにもそれらしいものはなにも死かった。不審には思わ死かった。彼は自殺した。數秒の後に眼差しをそらして、私は窓の外を見た。離れた向かいに家が三軒あった。その先に町らしきもの。或は散漫な樹木の茂り。遠い。空。まばたく。おもわずに私は、いまさらにこと葉を失っていた。なにか言いかけた譯でも死かった。私は家を出た。バイクに乗った。走らせた。

チャンが初めて私を知った時、ミーの家に忍び込んだチャンはその時リビングでスマートホンを弄っていた。外で昼食を食べて、歸って、昼のシャワーを浴びて、そして出てきた私は彼女を見つけた。ロイはその比親戚の旅行會社を手傳っていた。雑務以外の何

をするでも死い。お情けに給料をもらうに過ぎ死い。チャンより一歳上のロイは中學までは出た。定年のタンは仕事をしてい死かった。いつも誰かのうちに行って時間をつぶし、話すことが死くなれば携帯電話かスマートホンかを弄った。カラオケと社交ダンスが趣味だった。どれも見せられる腕では死かった。私以外に、ベトナム人たちの家にいるものは誰もい死かった。チャンはそれを知っていた。

チャンはショートパンツだけで、上半身を曝したわたしを見上げて、そして一瞬に色氣づかせた目を逸らさなかつた。こぼれんばかりにも無言で笑んだ。たゞわたしを見つめて、その知性を感じさせ死い微笑を呉れた。あるいは、素直過ぎる微笑だった。

幼い少女はスマートホンを手放さ死い。

メッセージが届いた。

電子音が短い音を立てた。

私は微笑んでやった。

共通言語は何も死かった。

微笑み合うしか死かった。

ミーの寢室に T シャツをとりに入りかけて、ふいに私は立ち止まった。振り向き見た。少女が微笑み続けていた。彼女が私だけを見ていることは已に知っていた。容赦も死く赤裸々だった。何を思ったわけでも死かった。私はチャンを手招いた。駈けるように、わたしに従った。私が蚊帳をはぐってベッドに横たわるとチャンも身を滑り込ませた。押しつぶされた鈴を無理やり響かせたような、そんな音が耳元にした。ふれそうな距離に唇が息遣った。壁に白い蜥蜴が張っていた。つぶれた鈴の音が蜥蜴の鳴き聲だったことを知った。チャンは何をすべきか已に知っていた。初めてではないのかも知れ死かった。私はそう想った。自分で服を脱ぎ捨てると、かの女はわたしをまで脱がせて、息を附く暇もなく、臙而上になった。迷いは死かった。そのためこゝに來たことを私は知った。終わったあと、やがてうた々寢をはじめたチャンがまわした腕をほどいて、——その拘束は無効だった。もはや。眠りにおちて仕舞えば。私は庭に出た。庭の離れの隅のひときわに巨大な樹木に花の咲いていたのを見た。それ迄氣附か死かった。背の高い樹木を見上げた木漏れの逆光のそこに、小さな白い花が無數に咲いていた。幼児の奇形の手のひらが、ちいさいま々に無理やり開いたような、そんな歪な放射をさらして、それら數しれ死いの花々がそこゝこに固まって咲く。花の集落は葉の茂りの夥しさの隙間々々に點在する。なにか、樹木に寄生したことなる異物が繁殖をさらしたようにしか見え死い。とても樹木のそれ自身のものとは。…見え死い。娑羅雙樹だった。地面に幾つかその花が頸ごと墜ちていた。

夕方に目を覺まして、チャンは出て行つた。カンの家には歸らなかつた。半年近くチャンは家出した。

二月の終わりのいつか。

ハオは彼の家のベッドの上であおむけに股を開いた。

韓國人、本当に怖い。

そういった。——あいつら、と。まだ、ダナンにいる。もう歸ってほしい。

「コロナ？」

指先に、彼を弄んだ。その

「ベトナム在住の奴だっているでしょ。」

午前の、斜めに進入するひかり。もしも

「そういう奴って、」

光にも乗って感染拡大し、増殖するウイルスが存在したら？

——関係ない。迷惑。

わたしたちは速やかに人類同じ

——差別じゃないよ。でも、

最期の時を迎えるに違い無い。

——あぶないから。

光。

——それが現実。

指先が形をなぞる。

ハオが笑った。

指の腹が粘液をこねる。

ハオが一度だけちいさく息を亂す。

私はほゝえむ。

薬まみれでしょ、あいつ。

妃奈子が云った。

まだ東京にいた比、いまだ Covid 19 などゝこかの蝙蝠の體の隅でせつせつとその生命をつなげていた時に。

それとなく、由樹子が私を知ったことに氣附いたことは明らかだった。

「薬？」

——頭の中、半分以上いろんなお薬でこわれてるの。だからじゃない？ 髪の毛、匂ってみ。ちょっとくさいから。

明かな悪意を眼差しと頬にさらして。

4月3日、ヤンの夢を見た。

指に白濁した液体を執拗に撫ぜこねて、私を見つめていた。

いつもの茫然とした眼差しで、そしてかすかにひらいた唇がいき遣った。

——やめて。

私は云った。

——自分勝手に、俺で、しないでくれる？

ヤンの指先のその白濁が

——俺を、勝手に強姦しないでよ。

私に吐き出させたものだということは
——やめてくれない？
おそらく誰もが知っていた。たぶん、
——移るよ。コロナ。
世界中の誰もが。「もう遅いよ。」
茫然としたままにヤンが笑う。
「もう、」
と、私は聲を聞く。
まばたく。

由樹子が死んだことを告げた日に、妃奈子は昼下がりになるまで私に覆いかぶさって離れ死なかった。

正午に、窓越しの陽ざしが直射した。

肌を音も無く日は焼いた。

カーテンを閉めるべきだった。

妃奈子は放置した。

なんの切っ掛けも死なかった。午後一時を過ぎて、それまでなんらうたゝ寝どころか目を閉じることさえもし死いで、なにもし死いまゝに私の躰の上ですごして、いきなり身を起こすとシャワールームに姿を消した。におうほどに女じみた肉體を半身だけの黒い翳りが包み込む。床に翳が乱れる。

不意に、長すぎることに氣附いた。譬えわたしという外部者のうつした穢れを恐れて、執拗に自分の肌から浴槽からなから洗い續けていたとしても、いくらなんでも長すぎた。正確には判らない。たぶん三十分くらい。バスルームは狭い。人の身體も、すくなくとも太陽の半径よりは小さい。ウイルスにとっては肥沃廣大な沃土であっても。

私がシャワールームのドアを開けた。撒き散らされていた水滴は已に奇麗に乾きゝっていた。シャワーを浴びもし死いで便座に座った妃奈子がうつむいて泣きじゃくっていた。乃至は、痙攣しかけてゐた。吐いていた。便座の中には入らずに、吐かれた悉くが彼女の膝と便器を汚した。

「...怖いのか？」

思わず、私は云った。

聲。自分の耳元にさゝやくそれ。

妃奈子はなにも答え死なかった。

「死ぬのが、——死にたく死いの？」

「死にたい。」

「怖く死いの？」

「怖い。」

「死ぬのが？」

「怖く死い。...別に、」

言いかけて、振るえる喉が聲を詰まらせた。その時には已に妃奈子は自分が云おうとし

たことを、あるいはなにかを言いかけていた事実をさえも忘れた。

「洗い流しちゃえ。」

私は云った。

「全部。」

「無理。」

「お前の存在ごと洗い流しちゃえよ。」あるいは、私は聲を立てて笑いそうになっていた。

妃奈子の嗚咽がシャワールームに響いた。

三月。28日の土曜日にハオは私を家に呼んだ。

家の前で電話すると、いつものように階段を降りて、姿を見せる。駆け足に手を振る。

家の中に手招きしながら、そして彼に近附いた私に、ハオは日本製の除菌ティッシュでわたしのくちびるを拭いた。——笑っちゃうよね。

ハオが耳元にさゝやく。

——頭、おかしいよね。

私は抵抗し死かった。

笑んでいた。ふたりの男が、笑みあって見つめていた。除菌剤のものなのか、鼻の至近で薬剤くさい醜えた匂いが立つ。「逆に、身に悪そう」

云ったのはハオだった。

「しかた無いよね。」

さゝやく。

「死にたく死いでしょ？」

笑う。

私たちは二階で口付けあった。

液体にまみれて貪る。

4月の23日にダナン市の外出自粛勧告が解けると一斉にカフェが正規オープンした。朝から、慥かに街には活気があった。夕方、明日から再開する小さな会社や店のところどころで店前でパーティをしていた。いずれにしても、パーティに始まってパーティに訖る國なのだった。晴れていた。

明けた24日は朝方豪雨が降った。土砂降りの雨が町を満たした。金曜日。午前の終わりがかけた時間に私は妃奈子のホテルに行った。下でLineを鳴らした。——なに？

「隙だろ。」

——隙。

「どっか、行こうよ。」

——なんで？

「もう大丈夫らしいよ。」

——なにが？

「コロナ。」

——そうなの？

「行きたいでしょ？」

——なんでよ。

「引きこもりすぎて、飽きたろ？」

——そうでもない。

ホテルの外に出ると、妃奈子は明かな不満を曝した。「雨じゃん？」

「降ってるうちに入らない。」

「だったら、昨日行けばよかったじゃん。」

「知ってたの？ 解禁になったの。」

「ホテルの子が云ってた。お兄さん、いま、兵庫で働いてるらしい。」

バイクでリンウンとう寺に行った。海沿いの山の傾斜に立てられたそこは海が一望できた。未だに閑散としていた。いま、コロナ禍が終わった（——と、見なされた、）當日この雨の日に、寺に観光客など来るはずもなかった。足元に樹木が茂った山肌が見えた。向こうに海が雨の中に霞んだ。海は東にある。

「あそこじゃ、まだ、お盛んらしいね。」

海の東には日本がある。

「コロナ？」

「終わったらパーティなのかな？」

「パーティ？」

「人類が勝利した、解放の祝祭、...的な」

「まさか。」

私は云った。「國が亡びて屹る戦争じゃないんだぜ。いつ、ウイルスが降伏宣言するの？」

私は妃奈子の額に、「紙切れの講和條約とか。」指先で銃をつくって、「休戦協定とか。」ばあんと。

唇の先につぶやいた。

鳥が飛んだ。

歸りのバイクの上で土砂降りの雨が降った。妃奈子が大声を上げた。悲鳴だったのか笑い聲だったのか。風が悉くに後ろに棄てた。

4月3日に、ミーの母親方の誰かの法事が在った。會は殆ど人を集めなかった、近親の十人程度に過ぎない。ではいつも命日には大量の親族の大量の酒宴をひらく。ベトナム人はあれはパーティでは死いと云った。彼等のこと葉の定義を尊重すれば、何箱のビールが明けられようともそれはパーティでは死い。料理はミーとチャンが準備した。ロイが手傳った。口を出す以外に彼にできることは殆ど無かった。坊主も來なかった。法律上の世帯主らしいミーが褐色の法衣をきて、三度ひれ伏す焼香流儀で線香を具えた。巨大な佛壇、はなやかな電飾。具えた線香が燃え盡きた時に、パーティが始まった。十人ちょっと。丸テーブルの雙つをうめた。六十代の男が私に近づいてきて、この作法の

握手に手を差し出しかけて、すぐに手を留めた。お辭儀をした。Covid 19の影響なのか、單に日本人をからかったのか、それは知らぬ。テーブルの一つは、結局はだれも使わなかった。いつもの半分にも満たぬ疎らの人の息遣い。だれか連れてきた子供が遊んだ。タンがパーティの始まる頃合いに、呼んでもいぬいの顔を出す。尿のチューブは付けていない。介護おむつを付けているらしいことが、かすかにふくらんだショートパンツ越しに察せられた。ビールを飲もうとした。隣の三十代の男が大げさにそれをとどめた。タンが云った。大丈夫だ。医者だって少々ならいと云ってる。誰も彼にそれを赦さなかった。タンはひとりでビールを開けた。タンは二口で顔を赤らめた。明らかに躰が拒否しているのが見て取れた。ミーは最早にも云わなかった。死を望んではいぬい。にも拘わらず、死に接近するを咎めぬい。ロイはチャンをからかった。タクシーが向こうの大通りに就いた。ミーが立ち上がりかけた。タクシーの中から、派手なドレスを着た、フル・メイクの六十代の女が姿を顯した。ロイの實母の姉か妹かだった。タンは氣附かぬかった。ビールにはもはや手を付けぬかった。料理にも手を付けぬかった。話にも参加できぬかった。私はタクシーを見ていた。タクシーは綠色だった。六十女がタクシーに金を拂った。拂いおわらないうちに、ヒエンが、身をねじりながらタクシーを降りた。そこにだけ地球は違う重力をかけていた。腰から足から首筋から、奇妙にもかの女はひん曲げて息遣った。骨格は正常なまゝに。ミーと同じ法衣を着せられていた。躰軀を斜めに大げさに傾け、ヒエンは内またの兩脚で地面にだゞをこねるように撥ねながら歩いた。つまずいて、ころびそうなのを私は危ぶんだ。十歳くらいの子供が派手な笑い聲を立て、彼が久しぶりに見るヒエンをあざ笑った。邪氣などなにもぬくに。ロイが、不意に氣づいて口を開いた。何も言わぬかった。ロイは立ち上がって、奥に姿を消した。周圍の人間になにか言い譯していた。私はもはやロイを目で追わぬかった。ヒエンの疾患が、肉體上のそれなのか精神のそれなのか私にはわからぬい。障害ないし症候群ないし症状の、その正確な名前もわからぬい。いずれにして明らかに、誰とも異ってあることをあからさまに曝していた。即ち、彼女は狂っていた。のどから引きずり出すような獨りごとを盛んに、時にさげび、時につぶやき、時にわめき、時にさゞやき、或は、歌うような音調を付けて鳴らした。二十代半ばの、何度か見かけたことのある青年が席を姉妹に譲った。テーブルをかたづけて、あたらしい皿を用意するようにチャンに命じた。青年が充分に礼儀正しいは、私は已に知っていた。前もそうだった。ロイは母親になにも云わぬかった。毛嫌いするそぶりもぬかった。他人にすぎぬかった。いつものことだった。あくまでも、彼は自然だった。市場へひとり買い物にでかけて、それから歸ってきたにすぎぬい母親を無視するように、ロイにはなにごとともぬかった。テーブルの大皿に盛られた、已に食べくさしの茹で鶏をヒエンは手づかみにつかんだ。傍らの四十過ぎの女が舌打ちして、そして笑った。六十女は焼香していた。ヒエンはつかんだそれを口に近づけて、手をとめた。眼差しさえもが空中に停滞した。何か考えていた。乃至は感じていた。乃至は聞いていた。したゞる肉汁とゞもに握りつぶしかけた手の平がいきなりにひらかれて、テーブルと膝に鶏肉を散らした。後ろで礼儀正しい青年がなじった。手拭き紙を差し出してやった。ヒエンの横向きの眼差しが斜め上の方の何かを見詰めていた。私は席を立った。周圍の人間に笑んで會釈した。何人かは相變らずに握手の手を差し出しかけた。娑羅雙樹は三月か四月の花、——つまりは如月の花なのかも

しれない。何というでもなく少人数の、会話の弾むわけでもない酒席をはなれて私は庭の木陰に入った。夥しい葉の夥しい翳りを土に投棄てた巨大な樹木を見上げれば、そこにその奇形じみた花が点在していた。何度見ても葉の緑の色彩を侵した黴か何かにか見えぬ。樹木は花に寄生されていた。私にはそう見えた。

うたゝ寝から目を覚ます。4月16日。ベッドから起き上がってリビングに出た。ユエンはどこにもい無かった。喉が渇いていた。沸かした水の冷やしたのを冷蔵庫からとって、グラスに注いだ。落とす氷が音を立てゝ割れた。呑む前に、テーブルに置いた。テーブルとグラスが音を立てた。半ば閉ざされたシャッターを押し開いた。背後に人の氣配がした。リビングの隅に立ってチャンが私を見ていた。表情が死かかった。たゞ眼差しが冴えた。チャンはミーの家で時間をつぶしていたのだった。それに氣附いた。妹をあやしに来たのかも知れなかった。やゝあって、私に見つめられて居ることにチャンは氣附いたに違いない。零れるように、いきなりに微笑んだ。私は彼女が傍らに近づくのを待った。彼女は微動だにしなかった。グラスに目を落とした。水滴を肌に粒だたせていた。その氣があったわけでは死かかった。私はチャンに近づいた。すれすれに添うと、彼女の髪の毛の匂いが鼻に立った。チャンは瞬きもし死かかった。私は自分が微笑んで居ることはしっていた。私はチャンをひっぱたいた。チャンは聲を上げなかった。空気のこすれる音を聞いたような氣がした。チャンが顔を上げた。失神しかけた眼差しを曝した。腹を殴った。崩れそうに身を曲げたチャンの髪を引っ掴んだ。指のあいだに髪が絡んだ。汗ばんではいなかった。肌を切るような鋭さがある氣がした。蹴り上げて、私はチャンを床になぎ倒した。チャンは倒れながら逃げた。追いかけるほどでも死かかった。力盡きるように佛間の祭壇の前にうつぶせたチャンの髪を再びつかんだ。あお向けにした。ひざまづいて跨ぎ、私はチャンを何度も殴打した。何度かチャンは白目を剥いた。庭に咲いてゐる娑羅雙樹の、その匂いさえ嗅いだ が死かかったことを思いだした。チャンのゆるくひらかれた唇がかすかに亂れた息を吐くのを聞いた。私はチャンを抱いた。床にはぎとられた衣服が散乱した。日差しを浴びた。正午を過ぎた筈だった。チャンの躰の中に痕跡を残した。チャンは吐き出されたその、躰内の存在に氣附きたい違いない死かかった。眼を開いて私の上で思わずに庭を見た。横向きの顔に日の光が横殴りにさした。青暗い翳りが肌のおうとつに添うた。私の指が彼女の腹部にふれた。やわらかな質感を指の腹が感じた。指がなぞって上にすべれば胸のふくらみを迂回して、胸元の肋骨の感觸にふれる。鎖骨を通り過ぎた首にふれた。片手に頸を絞めた。少女の首は細かった。充分だった。チャンは身をのけぞらしかけた。私は赦さ死かかった。チャンの頸をつかんだままに私は彼女のくちびるを奪った。チャンはもはや自分が口づけされていることをさえ認知し死かかった。頸の手を解いたときにチャンは大きく息遣った。吐かれた息が鼻先に感觸を残した。いきなり身をのけぞらせてチャンが叫び聲を立てたように思った。聲はなにも唇をこぼれ出さ死かかった。おおきく擴げられた唇を見た。突き出され、曲げられた背筋が胸をおおきく湾曲させた。息を吐き出し切った腹部が、息をすいこまずにへこんだまゝに、かすかにふるえた。聲の死い大口の唇は、或は痙攣しているのかも知れ死かっ

た。私はそう思った。夢を見た。チャンを上に乗せた儘に、午後に差し掛かった日差しの中でとじるともなくとじられた瞼のうちに全裸の少女がうつむいて花を食い散らした。花の名前は知っていた。庭の娑羅雙樹だった。私にはその花の匂いを嗅ぎ取らせてくれと少女に願った。こと葉も死くに。汚らしい喰い方だった。耻らいも作法も何も死い。飢えた犬が肉を喰い散らすように。私は少女の髪をつかんだ。顔を上げさせた。その瞬間のあまりの抵抗の死さにこの少女の頸には元から骨など有りはし死ったことに氣附いた。抑ゝ骨格などにも死かったに違い死い。生きて在る がもはや不都合な奇形にすぎ死い。彼女が生まれるためにこの世界は生まれたのではない。この、本来、無機物の支配する世界。宇宙の膨大な領野を占めるそれら。いのちなど必要としない存在。太陽の光は貴方を照らすためには存在しない。あなたはただ略奪して寄生したにすぎ死い。尊厳もなにも持ち合わせずに。恥辱と汚辱そのものもとして、と。少女をなじろうとしたときにその少女の顔に見覚えが在ることに氣附いた。誰か判ら死かった。自分自身なのかもしれない死かった。だれにもかれにも似ていた。空洞にすぎない抉り取られた眼窩から夥しい血が溢れた。まるく開いた口蓋の、鯨の齒じみた夥しい齒が咬みつぶしすりつぶした奇形じみた花の、白いそれらの匂いが立った。すさまじい悪臭に過ぎ死かった。腐った肉に糞尿を雑じらせてさらに腐らせてもこんな匂いなどし死いに違い死い。私は泣きそうだった。已に泣いていたかも知れ死かった。記憶が死かった。花が匂った。無残な齒のいたるところがおびただしく白い花のすりつぶされた色彩のむごたらしさに穢れた。私は少女とおなじく口を開いていた。おこぼれを乞うように。ないし能死しの無様な模倣を曝して？ わたしは瞬きさえし死い。瞼など已に焼き盡きたに違い死い、と。開いた眼差しに日差しがふれていた。見上げた天井の近くに蝶が舞った。白かった。夢の記憶が目覺めた。想い出す寸前のその意識の中の觸感を感じていた。庭の娑羅雙樹を思った。未だに現實に咲くそれを、いまさらに見ておきたかった。欲望に近かった。チャンは未だに私の上に身を預けていた。眠っているのだと思った。凡ての躰重が赤裸ゝにもかけられていた。頭をなげた。形態に違和感が在った。手のひらの濡れた觸感に氣附いた。私は遜れるように、――投げ棄てるように。チャンを引きはがした。ゆかに仰向けに転がったチャンの死體の頭部は砕かれて、最早もとの形態をなど留めなかった。残った片目の閉じられ死いのが、なにも見ていない眼差しのうちに何かを見ていた。それは慥かにチャンの目だった。立ち上がった私は自分のむねに就いた夥しい血の夥しさに氣附いた。庭を見た。死因はわから死い。ユエンがうつぶせに倒れて死んでいた。周囲の黒ずみ。それがなにかは判らない。体内の汚物なのかなんなのか、下半身が濡れて黒ずんでいた。或は撒き散らされた血だったのか。目を背けた。庭を出た。大通りに出た。人の氣配は最早死かった。空に飛ぶべき鳥の悉くが路上に落ちて体の周圍に泡を立たせていた。橋げたに衝突したトラックが焼け盡きて、くすぶった炎をかろうじて立てながら細い黒煙を膨大にも上げていた。男の死骸が転がっていた。うつぶせだった。頭が吹き飛んでいた。腹を割った犬が内臓と血の黒ずみをさらしながら道の真ん中に死んでいた。大通りの向こうにまで転がったバイクと、恐らくは投げだされて転がったいくつかの死體が點在した。橋に向かって歩いた。大通り沿いのカフェに二十體ばかりの死躰がそれぞれの形に転がっていた。千切れた足が街路樹の下にあった。女のものに見えた。あらゆる場所で、あらゆる生き物が死んでいた。空の色彩がいつにもまして瑞々しく、澄ん

でいることに氣附いた。生き物が死なくなったからなのだろうか。行くあては死ななかった。高みから街を見下ろし、總てを確認する必要を感じた。橋にあがる螺旋階段をのぼった。所々に散亂する死體の數をかぞえた。橋の上に出た。遠くに黒煙が立っていた。バスが橋から落ちかゝっていた。燃えてはい死ななかった。割れた窓ガラスが路上にきらめき、窓に飛び出しかつた死體をいくつかぶら提げた。散在する汚物のような動きのない點在は死骸以外のなにも死ななかった。私は氣附いた。死んだのは、と、彼等ではない。彼等はしななかつた、と、私は息遣う。

細胞が脈打つ。

2020.4.22-26. 黎マ、未完成

それでもわたしたちはせかいをいやしたがった、あいかわらずに猶も

著 Seno Le Ma

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
